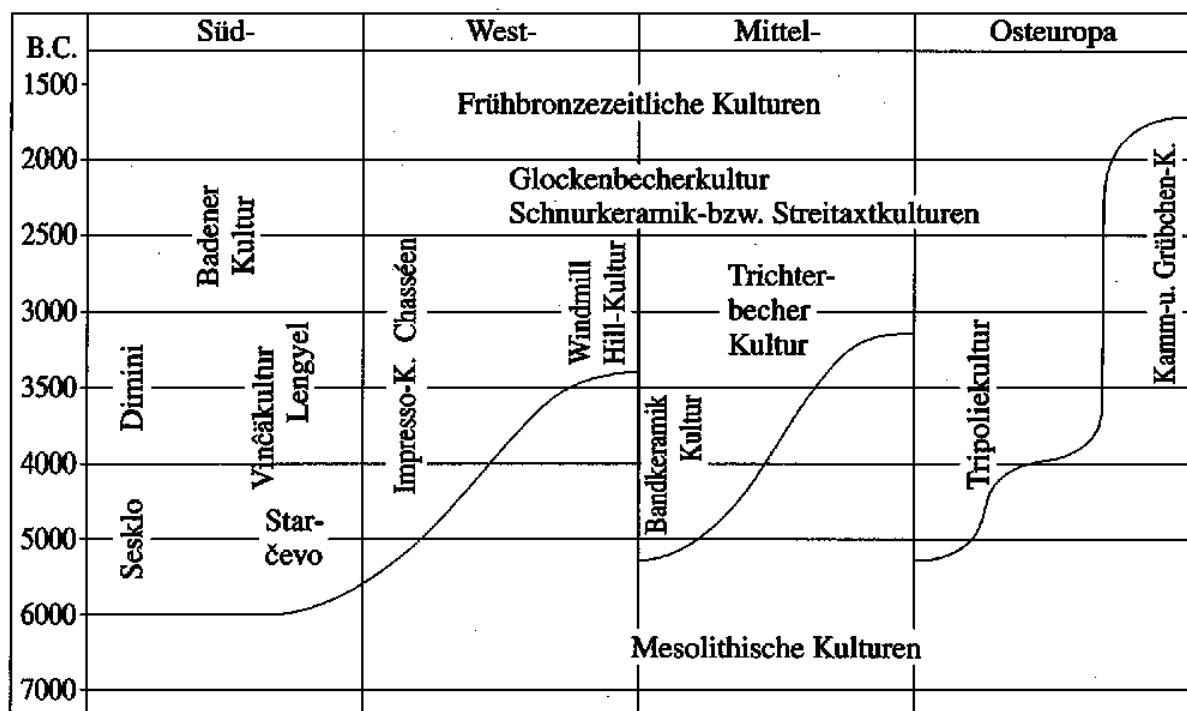


# ヨーロッパ地域における帯文土器文化民 の定住と心性

三 浦 弘 万

## 第1章 帯文土器文化民の農業生産主体としての発達

ヨーロッパ地域における自然環境の推移は、第4紀完新世の氷期以後、すでに紀元前8500年ないし前6800年ごろから、温暖なボレアル期 (Borealzeit) に入り、夏季に現在より約2.0℃から2.5℃高い気温値を示すに至り、地中海・北海の水面が2.5mほど上昇した。高地では樅<sup>もみ</sup> (モミ属 *Abies*, Tannen, firs), 松<sup>まつ</sup> (マツ属 *Pinus*, Kiefern, pines), 中山地帯周縁と低地ではセイヨウハシバミ (*Corylus avellana* L.), オーク (ぶな科コナラ属 *Quercus*, Eichen, oak) などの森林地帯が広がり、堅果 (ナッツ nuts), 果実, 根茎, 塊茎などが人びとの食糧となり、堅果は家畜の飼料にもされるようになった。第4紀の氷期に、氷河によって運ばれた<sup>がんせつさいりゅう</sup>岩屑細粒が融氷水に洗い出されて、堆積し、そのなにはマンモス, ケナガサイ, オオツノシカ, バイソンなどの大型哺乳動物の化石が含まれ、細粒堆積が風によって吹き上げられて出来た軽くさらさらしていて、あいだに間氷・亜間氷期の幾層もの古土壌を挟み込んだヨーロッパ大陸のレス (風成<sup>シルト</sup>沈泥堆積層) 地帯 (Lößzonen) に [図1 A, B] のように、ヨーロッパ地域では、前5000年代末ないし前4600年から前3800年ないし前3600年, さらに地域や場所によって前3200年ごろにかけての時期に、西アジアからブルガリア (Bulgaria), バルカン半島ギリシャ北東部のテッサリア (Thessalia) を経て、ドナウ川流域を遡り、ヨーロッパ南東部から中部に至るドナウ川中・上流域を



〔図 1 A〕 ヨーロッパ地域における紀元前7000年から前1500年の諸文化

(Geschichte der Urgesellschaft, von einem Autorenkollektiv unter Leitung von H. Grünet, Berlin 1982, S. 247, Fig. 59 に基づき, 作成。)

v./n.Chr.	Periode	Archäologische Kultur
500	Jüngere römische Kaiserzeit	
0	Ältere römische Kaiserzeit	
	Jüngere Vorrömische Eisenzeit	Latène
500	Ältere Vorrömische Eisenzeit	Billendorf Jastorf
1000	Jung-Jüngstbronzezeit	Lausitzer Kultur
1500	Mittelbronzezeit	Lausitzer Kultur
2000	Frühbronzezeit	Aunjetitzer Kultur
2500	Endneolithikum	Glockenbecher Schnurkeramik
3000	Spätneolithikum	Kugelamphoren
3500	Jungneolithikum	(Gatersleben) (Jordansmühl) Stichbandkeramik
4000		
4500	Mittelnolithikum	(Rössen) (Lengel)
5000	Frühneolithikum	Linienbandkeramik
5500	Mesolithikum	

〔図 1 B〕 エルベ川上流域, 中・新石器・金属器時期の文化の編年

(J. Lüning, Gliederung des Neolithikums, in: Germania 74, 1996, S. 233; H. Küster, A. Lang u. P. Schauer, Archäologische Forschungen in urgeschichtlichen Siedlungslandschaften, 1998, S. 81, Abb. 8 に基づき作成。)

中心として、初期新石器時期の多様な刻線文<sup>こくせんもん</sup>や場合によっては彩色を施された帯文土器文化に顕著な特徴を示す人びと (Linear-oder Linienbandkeramiken-kulturleute, Linear Pottery culture's people) の生活が展開し、「ドーナウ川流域文化圏」(Donauländischer Kulturkreis) の形成をみた。

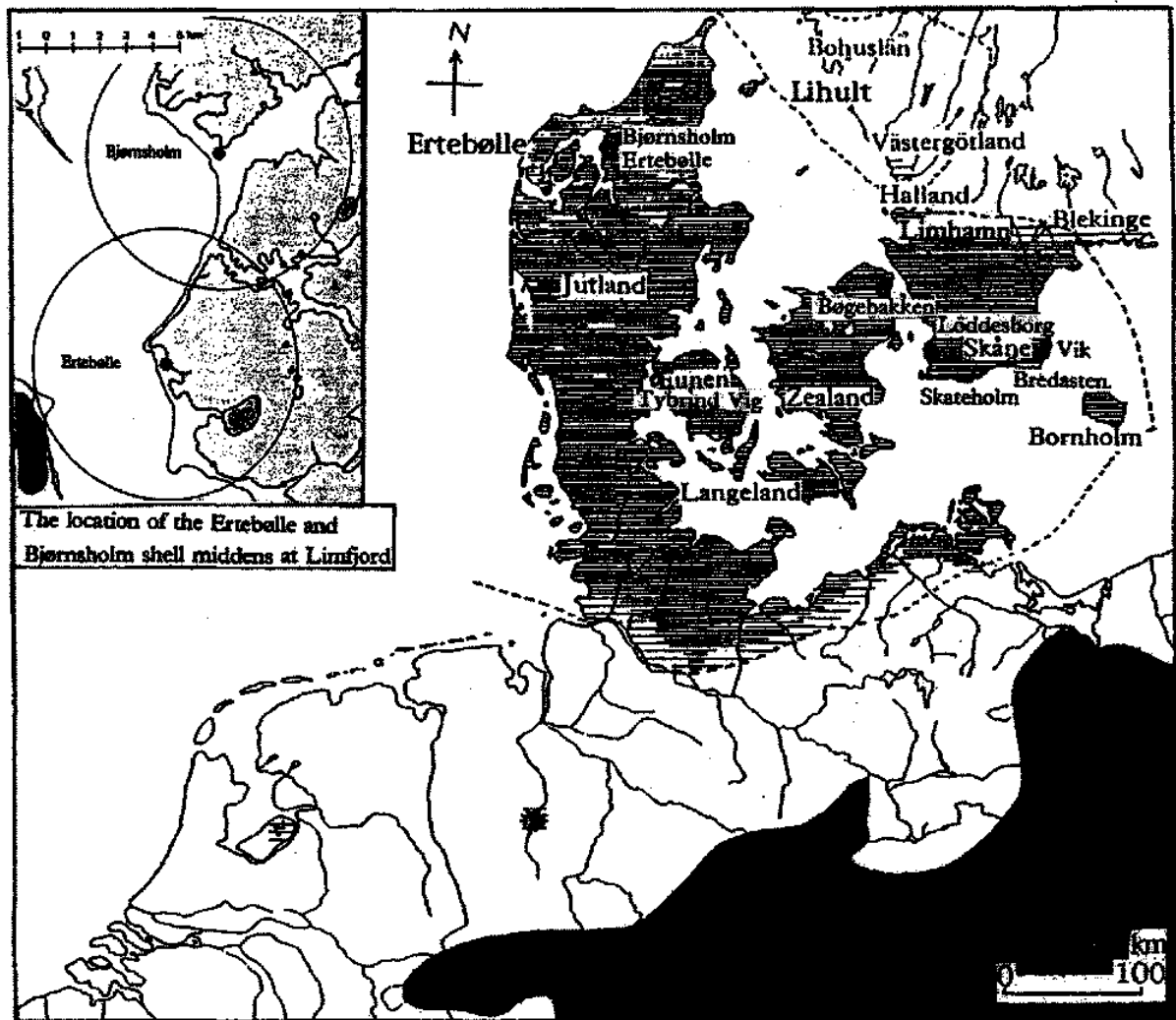
前期帯文土器文化はチェコスロバキア中部のモラヴァ (Morava, Mähren, Moravia), オーストリア東部のニーダーエスターライヒ (Niederösterreich) から、一方はドイツ中部のヘッセン (Hessen), 他方はエルベ川上流域, ハールツ山地の北前山 (das nördische Harzvorland) へと広がった。さらに, エルベ川上・中流域, ライン川上・中・下流域では, アイルスレーベン (Eilsleben, Kr. Wanzleben), オランダのエルスロー (Elsloo, Prov. Limburg) などの前5250年ごろから前4900年にかけての遺跡に, 刻線文土器 (Linear-oder Linienbandkeramiken) と栽培作物・家畜の遺物が出土し, のちには刺突帯文土器 (Stichbandkeramiken) が出土する<sup>1)</sup> ([図2])。帯文土器文化は, さらに後期に, 精細な渦巻<sup>うずまき</sup> (Spirale)・雷文<sup>らいもん</sup> (波形渦, 蛇行文 Mäander) の組み合わせ文様の土器, 刻線や擦り刻み目に赤・白色鉍土を充填して彩色を施した土器, 人面や牛・豚の描写文様のある土器, 側面や上部に粘土を造形的に載<sup>の</sup>せ付けた装飾のある土器が, 北へ, 西へと広がって分布した。ヨーロッパ北部では, 前5000年から前3200年にかけての頃, 特色ある中石器最終期のリフルト文化 (Lihult culture) とエルテベレ文化 (Ertebølle culture) が併存して発達し ([図3]), やがてこの地域でも刻線帯文土器文化の影響を受けるようになる。

新石器時期初期 (Frühneolithikum) の帯文土器文化民は, 後氷期 (Nacheis-, Nachkalt-oder Nachglazialzeit, c. 10000B.P.~id est 8000B.C.~) にかかわる原生林の生態系を観察し, 自然環境諸条件の情報を感知して対応し, 自然への働きかけは, その植生が彼らの行なう耕作栽培経営 (Anbauwirtschaft) に適合したレス堆積土壌地帯 (Lößablagerungsbodengebiet) のオーク (ヨーロッパ中部に繁茂したコナラ, いわゆる西洋ガシワ) 混合 (混交) 樹林 (Eichenmischwälder) の周辺に住み, 工夫を凝らし, 石製の研削・研磨盤と細石器<sup>のこぎりば</sup>の鋸齒などによって研ぎ, 切り整えた石刃材に, 回転棒と研磨用砂を使って穴<sup>うが</sup>を穿ち, これに木製柄<sup>は</sup>を嵌め込み, 骨・角の



1. 刻線帯文土器 (Linearbandkeramik) の (Bylany bei Kutná Hora ボヘミア出土) の  
 装飾文様展開表示, 2~10. 刺突文土器 (Stichbandkeramik, 4を除き, ボヘミア出  
 土) (2, 3. Praha-Sedlec, 4. モラヴァ Vicoměřice, 5. Štáhlavice, 6. Praha-  
 Dejvice, 7. Žalany, 8. Bzany, 9. Vyškov, 10. Mělník), 11. 縦溝文 (様) 土器  
 (kannelierte Keramik. レンジェル Lengyel 文化に関係した新石器晩期 Äneolithikum の漏  
 斗状杯文化 Trichterbecherkultur. 集落に掘溝ないし柵をめぐらし, 土葬・火葬 Körper-  
 und Brandbestattungen を伴う盛り土墓・古墳 Hügelgräber をもつ農民が担う。)

〔図2〕 帯文土器と縦溝文土器 (J. Filip, Böhmen u. Mähren, in: *Real. d. Germ. Alt.*, Bd. 3,  
 1978, S. 131, Abb. 19, S. 134, Abb. 20, S. 135, Abb. 21 に基づき作成。)



c. 5000-3200 B.C.

▨ the area occupied by the Ertebølle societies

■ the area occupied by the first farming (Linearbandkeramik) societies

〔図3〕 中石器最終期リフルト文化 (the final Mesolithic Lihult culture c. 5000-3000 B.C.), エルテベレ文化 (the Ertebølle culture in southern Scandinavia, Denmark and north Germany 4500-3200 B.C.) および早期農業・刻線帯文土器文化 (the first farming (Linearbandkeramik) culture) の分布地域 (Ch. Tilley, *An Ethnography of the Neolithic*, 1996, pp.10 f. Figure 1.1, 1.2, P.18, F. 1.7, P.51 に基づき, 作成。)

楔で固定した有柄の磨製石斧 (Beil), 大斧 (鉞 Axt, broadax), 靴型・平型手斧 (Dechsel, Schuhleistenkeil und Flachhaken), これで作成・加工された土地耕起の木・角製穴溝掘り棒 (Grabstock), 鋤 (Hacke), 燧石 (フリント Feuerstein, flint) 細片の歯を木製柄に嵌め込んだ鎌 (Sichel) などを, 道具となるように合目的に作り, それらを樹林の伐り開き, 住居の築造, 土地の開墾・耕作, 作物の収穫などに用い, 一部では焼き畑開墾 (Brandrodung) が行なわれた。耕作に初めは犁 (Pflug) はまだ知られていなかった (犁の確実な利用は新石器後期 Spät- und Spätestneolithikum の漏斗・じょうご状杯文化 Trichtbecherkultur においてである [図2] 参照)。彼ら帯文土器文化民は樹林伐採, 焼き畑・開墾農耕を大自然に共同体的に働きかける形態をとって営み (gemeinschaftliche Aktionsform der Brand- und Rodungsfeldbauwirtschaften), 彼らの特徴は, 樺 耕農業 (Hackbauwirtschaft) の「移動農耕」(Wanderfeldbau) を行なう「移動農民」(Wanderbauerntum)<sup>2)</sup>が, 定住化に向いつつあった点にある, ということができる。彼らの多くは, オーク混合樹林周辺の谷間や川端から遠くない所に, 家屋敷群を設け, 近くの開墾地で, 西アジア, ブルガリア, ルーマニア, バルカン半島諸地域との文化関連を通じて伝えられた穀類, 豆類, 亜麻, 野菜などを栽培し, ヒツジ, ヤギ, ウシを枝葉・干し草飼 (Laub- und Heufütterung) の舎飼, 家屋敷地ないし集落の柵囲い飼 (Pferchung) と森林 (樹林) 間放牧地 (Waldweide) への放牧によって飼育し, ブタには, 森林放牧においてオークの実・どんぐりを食べさせた肥育 (Eichelmast, 肥えさせ飼い Viehmast) が, 行なわれた (森林放牧地利用 Waldweidegang oder-nutzung)<sup>3)</sup>。ヴェルム氷期後期から後氷期への推移の過程における上記の自然・生物環境の変化のもとで, 北緯中緯度地帯 (the north mid latitudes) でも, コムギ, オオムギなどの栽培とウシ, ブタ, ヒツジなどの飼育という農業生産方法 (agricultural modes of production) が定着 (fix, Stabilität) しつつあった<sup>4)</sup>。

西アジアですでに前9000年から前7000年ごろにかけて栽培化された一粒系 (染色体 Chromosom, chromosome 14本, 染色体基数 Genom, genome 7の2倍数, 2倍体 diploid) の野生小コムギ (*Triticum monococcum* L.) が, ヨーロッパへ

冬穀の栽培種として伝播したヒトツブコムギ (*T. boeoticum* Boiss., Einkorn), 二粒系 (染色体28本, ゲノム7の4倍数, 4倍体 tetraploid) のエンマ(一)コムギ (フタツブコムギ, イラク北部クルディスタン高原のジャルモ jarmo 初期定住農耕村落遺跡の前6750年から前5000年代に至る15層中の最下層に, 野生種 *T. dicoccoides* と栽培種 *T. dicoccum* Schübl., Emmer が確認され, ヨーロッパへ栽培種が伝播), 西アジアにおける栽培過程で, 4倍体のスペルト系コムギと野生タルホコムギ (*Aegilops sguarrosa* L.) の異種交配(雑)・変異によって生まれた小粒の三ないし四粒系 (染色体42本, ゲノム7の6倍数, 6倍体 hexaploid) の豊満粒で, 収穫量の多い普通系パンコムギ (*T. aestivum*, のち前3000年ごろまでにヨーロッパに広範に秋蒔きとして伝播・栽培され, 環境適応性の高い性質のこのパンコムギは, やがてヨーロッパ北部で春蒔(播)き種がつくられた), また根張りが浅く, やや耐寒・耐雪性が低く, 湿害・<sup>かん</sup>干(旱)魃に弱い<sup>ニジョウ</sup>二条オオムギ(<sup>ヤバオムギ</sup>矢羽麦, *Hordeum distichum* L. これは西アジアの乾燥地帯を自生地とした野生ニジョウオオムギ *H. spontaneum* C. Koch. が, イラク山岳地帯で前7000年ごろまでに栽培対象とされ, 上記のジャルモ遺跡の最下層からエンマ(一)コムギとともに出土し, 栽培種ニジョウオオムギが秋蒔き・春蒔き品種となってヨーロッパ各地へ伝播), <sup>タジョウ</sup>多条(普通)オオムギ・<sup>ロクジョウ</sup>六条オオムギ・<sup>シジョウ</sup>四条オオムギ(<sup>フセイジョウ</sup>不整条オオムギ。栽培種ニジョウオオムギが, メソポタミア地域で, 前7000年ごろ, 変異して, タジョウオオムギ *H. vulgare* の<sup>ロクジョウ</sup>六条オオムギ *H. hexastichum*, シジョウオオムギ *H. tetrastichum*, *H. irregulare* ができ, ヨーロッパへ伝播), コムギ, オオムギに混在していたものが栽培種化されて, 寒さの厳しくない地域の土地に適応していった<sup>エンバク</sup>燕麦(マカラスムギ, オートムギ *Avena sativa* L. これは中央アジアのカラスムギ *Avena fatua* L. に由来する), 耐寒性があり, <sup>や</sup>痩せ地 (barren soils) と酸性・アルカリ性両土壤に適応するスズメノチャヒキ属ライムギ (カフカス, 小アジア原産で, コムギ, オオムギの混生から分離・作物化されたコムギと近縁の *Secale cereale* L. *Bromus secalinus*, Roggentrespen), <sup>キビ</sup>黍(中央・東アジアの温帯地域が原産地で, ヨーロッパへは中石器時代に伝播していた *Panicum miliaceum* L.), <sup>アワ</sup>粟 (*Setaria italica* Beaux. コアワ var. *germanicum* Trin. ユーラシア夏季雨

気候帯の東アジアとアフリカ中部の熱帯草原 <sup>サバ(ン)ナ</sup> *saban*[n]a[h] に野生したエノコログサ *Setaria viridis* (L.) Beauv. から分化し、ヨーロッパ地域へ伝播した)、耐寒性の<sup>エンドウ</sup>豌豆(西アジアで野生していた *Pisum humile* Boiss et Nöe が栽培種化された *P. sativum* L.)、レンズマメ(<sup>ヘントウ</sup>扁豆、ひらまめ。西アジア・東地中海沿岸原産で野生していた *Lens esculenta* Moench が栽培種化された *Lens culinaris* Medik lentils)などの豆類、油を含む実を食用にし、茎表皮に近い韌皮繊維を衣服の材料とした<sup>アマ</sup>亜麻(カフカス山麓原産の *Linum usitatissimum* L.)、<sup>クシ</sup>芥子(罌粟。ヨーロッパ東部原産の *Papaver* L., Mohn, poppies)、採集ないし栽培された<sup>ニンジン</sup>人参(カフカス、中央アジアの野生種がアフガニスタン地域で栽培され、伝播し、ヨーロッパ原産といわれるに至った *Daucus carota* L., Möhrrüben, Karotten, carrots)、あかざ(藜)科<sup>シロザ</sup>白藜(シロマカザ・ギンザ *Chenopodium album* L. ユーラシア大陸原産)、<sup>クダ</sup>蓼(*Polygonum*)などの野菜・野草・香辛料を、性質と各地域の自然環境条件に適合した秋蒔きあるいは春蒔きとして栽培し、これらが労働対象(Arbeitsgegenstand, subject of labour)とされた<sup>5)</sup>。

すなわち、ヨーロッパ中部から北部の新石器時期文化群のもとで、西アジアから継受してヨーロッパ南・中部で比較的長いあいだ栽培されていた一粒系ヒトツブコムギは、スウェーデン南部の乾燥気味の山地でも、栽培されるようになり、ヨーロッパ南部から中部にかけてのドーナウ川中・上流域、ボーデン湖周辺・ネッカー川・ライン川流域などの平地の帯文土器文化民のもとでは、はじめヒトツブコムギと混合栽培され、やがてヒトツブコムギとの栽培比率が0.8対10から0.3対10というように、ヒトツブコムギに対して高率を示すに至った二粒系エンマ(一)コムギの著しい栽培が、みられるようになる。他方、ポーランド地域および南西ドイツのアルプス山麓地域の帯文土器文化民の諸定住地では、三・四粒系普通(系)スペルトコムギ(大スペルトコムギまたはドイツコムギともいわれる *T. vulgare*, *T. spelta* L.)が栽培された。なお、北方では、スウェーデン中・南部の帯文土器文化民のもとで、普通(系)スペルトコムギについて、その出土したわずかな遺跡があるにとどまる。ヨーロッパ中部に6倍体裸性のパンコムギ(*T. aestivum*)、スイスのヌーシャテル湖(Lac de



Neuchâtel) 岸, コルテヨ (Cortailod) 湖上・杭上住居群 (Pfahlbauten) などの遺跡に, 普通 (系) クラブコムギ (ゲノム 6 倍体, 裸性・密穂コムギ *T. aestivocompactum*) の栽培されていたことが, 認められる。エルスロー (Elsloo) では, 前5000年ごろに, ヒトツブコムギ, エンマ (一) コムギおよびケシとともに, スズメノチャヒキ (雀茶挽) 属ライムギ (*Bromus secalinus*, Roggentrespee, ryes) が, 冬作 (穀) 物として, 栽培されていた。また, ヨーロッパ中・東部, やがては北部において, エンマ (一) コムギと地域的にも時期的にも違いをなして栽培された多条オオムギ, そのなかで, 山岳地帯においてロクジョウオオムギ, 平地地帯でシヨウオオムギ, 他方, コムギ, オオムギの育ちにくい泥炭地, 砂地などの痩せ地に, エンバクと, とりわけ凶作に強いライムギ, 中部ヨーロッパ南・東部にキビが, それぞれ栽培され, 中部ヨーロッパの帯文土器文化民の諸定住地域において, それらのムギ類に加えてさらにエンドウ, レンズマメが盛んに栽培された。亜麻はドーナウ, ライン両川上流域の南ドイツ, スイスで栽培が見出され, 杭上住居遺跡からも, 亜麻が出土している。

人びとは, 元来, 大自然の特別な恵み (die besondere Gunst der Natur) のもとで, 自然物に採集・狩猟・漁労を行っていた段階において, すでに, ある期間, 洞窟・岩壁・川・池・湖の岸边などの<sup>すみか</sup>住処 (栖 dwelling) 付近の樹木に<sup>めじるし</sup>目印 (mark) を付け, 採集・狩猟・漁労地域, 水域の一部に境を定め, テリトリー (生息域 territory) を得, あるいは柵を設けるなど, 住処の安全と食糧の確保に努力し, 他の集団や個人の侵入に対して防御 (defense) する縄張り (一区域 Revier, Territorium, territory) を保持 (Halten, hold) していたが, いまや農業生産 (agrarische Produktion) への移行が始まると, 文字通りの「生存して活動する範囲」 (sphere of daily existence and activity), 畑地域 (Ackererde und -gebiet) を含めた生活領域ないし生活圏 (Lebensbereich) を獲得して, 定住生活方法 (seßhafte Lebens) を確実に進めつつあった。彼らは, 互いに共同体的に, 出来るだけ自然力を本来の形において働かせる状態で, 生産諸力 (Produktiv-oder Produktionskräfte, productive forces) を発達させて

いたが、それゆえ自然条件の変動に大きく制約され、その農業の発達には、原始的な形態の社会的な土地所有のあり方そのものが、深く関係していた。そして、彼ら住民が農業を生業 (Nahrungserwerb) として営むことに基いて、農業の特質と当時の発達段階における農業の置かれた位置 (Station) から、土地と一部の生活資料を共同社会全体で占有 (Besitz, possession (lat. possidere) する集団共同的・集産的 (kollektiv) 共同社会組織が発達し、農業の発達・伝播していった地域に、それぞれ特有な<sup>まと</sup>纏まりのある居住・定住様式・形態 (Wohn-und Siedlungsweise oder-form) が出現した<sup>6)</sup>。

すなわち、具体的に考察するならば、ヨーロッパ南東部、ブルガリアのノバ・ザゴラ (Nova Zagora) 近くで、エヴロス (Évros), マリツァ (Maritsa) 両川上流域、支流アズマク (Azmak) 川溪谷のカラノーヴォ丘 (Karanovo, Karanobo mound, tell) の、新石器時期 (7000/6500-2000/1900 B.C.) に属する磨製石器を伴う前6500年から前5500年までのあいだの遺跡<sup>7)</sup>に、多くは長方形住居 (長住居 Langhaus, longhouse 4.8m×7.2m, 6.7m×7.0m, 4.0m×4.0mなどの規模) 3棟から5棟の、1棟あるいは複数棟に居住した諸複合大家族共同態 (Komplexgroßfamilien) が共通の小道 (path, lane) を挟んで塊状あるいは列状にまとまり、全体で6棟ないし10棟ほどからなる群定住 (Gruppensiedlung), <sup>アルトツァイラー</sup>古小集落 (小村) 定住 (Haufen-und Reihen-Altweilersiedlung) が発達し、定住地近くの開墾された畑と放牧地で、コムギ、オオムギ、エンドウ、レンズマメ、ソラマメが栽培され、ヒツジ、ヤギ、やがてウシ、ブタが飼育されていた。住居のなかには、住居内の土中に埋葬の行なわれていたものがあり、各住居には、炉が設けられ、壺、動物 (ヒツジ、ヤギ、ややのちの時期にはウシ、ブタ)・人形の土偶が置かれていた。また、岩石や石・角製の道具に、伝承・説話に従って (legendary), 動物・人形が刻み、描かれ、土偶の造形とともに、ミュートス信仰 (der mythische Glaube, mythical faith) をもつ定住共同体が窺われる<sup>8)</sup>。そのような定住形態のセルビア、ドナウ川とその支流サヴァ (サーバ Sava) 川との合流点地域のベオグラード (Beograd, ベルグラード Belgrade) 近傍、スタルチェヴォ (Starčevo) の前6000年ないし前5500年から前4000年までのあい

だの、またその近くのヴィンチャ (Vinča) の前4000年ないし前3500年までの諸定住 ([表1]) に、集落住民共同で、堅い石材が調達され、各住居内で石製道具を製作し、炉で土器が焼かれ、それらの製品に、集落・地域的に顕著な共通の特徴がみられる。

ブルート (Prut), ドネストル (Dnestr, Doniester) 両川流域のルーマニア, モルダヴィア, ハンガリー平原東部のドーナウ川に流れ込むティサ (ティーサ *hungari. Tisza*) 川の支流ケレス (コエロエシュ *Körös*) 川流域に至るカラノーヴォースタルチェヴォーケレス文化に一つの典型的な例をみるドーナウ川とその支流域における「初期新石器農耕作物栽培・家畜飼育民文化群」(*frühneolithische, Donauländische Gruppen der Feldbauern-und Viehzuchtern Kulturen* ザーグロス山麓, クルディスタン高原, アナトリア半島, 地中海東岸の穀物栽培・家畜飼育農業技術の影響を受けて発達) に由来して、帯文土器文化 (*Bandkeramische Kultur*) が発達した。「ドーナウ (川流域) 初期新石器・新石器第1期文化」(*Donauländische, frühneolithische Kultur I*) に属した最古期・古期 [刻線] 帯文土器文化 (*die ältesten, älteren [linear-oder linien] bandkeramischen Kulturen*) は、レス土壤堆積地帯に沿って、ブルガリア, ルーマニアからドーナウ川を遡り, セルビア, ユーゴスラヴィア地域, オーストリアのニーダーエスターライヒ, ライン川上流域のドイツ南部から中流域のヘッセン, ラインラント, ヴェストファーレン, フランス北東部からベルギー, オランダを流れるムーズ (ミューズ *Meuse*, マース *Maas*) 川流域へ, またハンガリー, チェコ, スロヴァキア地域, そのチェヒー (*czech. Čechy, Bohemia, Böhmen*), モラヴァ (*czech. Morava, Moravia, Mähren*) 南東部からザーレ (*Saale*), エルベ (*Elbe*) 両川を<sup>くだ</sup>下り, ハールツ前地 (*Harzvorland*), やがてレス土壤堆積地帯の北境を越えたヴァルテ (*Warthe*), オーデル (*Oder*) 両川流域の新氷堆石層地帯 (*Jungmoränengebiet*) へと広がった。

ヨーロッパ地域における農耕文化の西方伝播の一つの起点とみられているボヘミアーモラヴァ (*Bohemia-Morava, Böhmen-Mähren*) に近いバーゼル (*Basel*) の南, ライン川上流域の支流ビルズィヒ (*Birsig*) 川溪谷のレス地帯,

〔表1〕 ヨーロッパ地域における紀元前の全体的な若干の遺跡の放射性炭素<sup>14</sup>Cによる年代測定値の比較一覧

遺 跡 名	国 名	時 代	文 化	測 定 年 代
パヴロフ Pavlov	チ ェ コ	旧石器	グラベット文化	24,800± 800B.P.
レ・セジー Les Eyzies	フランス	〃	オリニャック文化後期	23,600± 800 〃
ラスコー Lascaux	〃	〃	マドレーヌ文化初期	15,516± 900 〃
ラ・ガランヌ(サント=コロンプ) La Garenne (Sainte-Colombe)	〃	〃	マドレーヌ文化	12,986± 560 〃
スター・カー Star Carr	イギリス	中石器	スター・カー文化	7,538± 350B.C.
ヴィンチャ A Vinca	ユーゴフ ラヴィア	新石器	ドナウ文化 第1期	4,010± 85 〃
ヴィンチャ D	〃	〃	ヴィンチャ文化	3,645± 160 〃
ゴルニア Gornia Tuzia	〃	〃	スタルチェ ヴォ文化	4,440± 75 〃
トゥズラ A	〃	〃	ヴィンチャ文化	3,380± 60 〃
トゥズラ B	〃	〃	帯文土器文化	4,170± 60 〃
ヘールレン Heerlen	オランダ	〃	〃	3,953± 80 〃
アイスレーベン Eisleben	ド イ ツ	〃	ククテニ文化	3,130± 80 〃
ククテニ A Cucuteni	ルーマニア	〃	〃	3,060± 105 〃
ナッシュェンドルフ Naschendorf	ド イ ツ	〃	じょうご形 杯文化初期	3,230± 140 〃
ルカドゥール Roucadour	フランス	〃	シャッサー文化前期	2,320± 125 〃
〃	〃	〃	シャッサー文化後期	2,210± 55 〃
アンロー Anloo	オランダ	〃	巨石墓文化後期	1,848± 275 〃
ストウンヘンジ Stonehenge(Salisbury)	イギリス	青銅器	巨石墓文化後期	

ボットミンゲンのブルーダーホルツ (Bruderholz in Bottmingen) 台地に、帯文土器文化民の、硬くて緻密な質の石英を主体とした変成岩の珪岩 (Quarzit. 火打ち石・燧石 Silex, Feuerstein, Kiesel) 製で、獣皮の削ぎ取り、木・骨の削り、建物用材の加工、農耕の土削り取りに用いられた削器 (搔器, スクレイパー Kratzen, scraper) が多数出土し、帯文土器の成形・焼成と並行して、多様な削器製作が盛んに行なわれており、チューリヒ (Zürich) の東、グライフェン湖 (Greifensee) 岸のシュトーレン・ヴィルトスベルク (Storen-Wildsberg) では、根茎・塊茎・堅果のほか、穀物をも碎き細かくするために用いた石英斑岩 (Quarzge-Porphr) 製の碾臼 (挽臼 Mahlstein, hand mill) の製作技術が発達し、研磨された合わせ面にまだ放射状の溝は刻まれていない下石 (Unterlage. 楕円筒形, 長軸・短軸・高さ 28.5・23.0・10.7cm, 重量 8.3kg, 40.5・26.5・15.6cm などの平均重量 24.2kg) 41個, 回転石 (Läufer, 搗 (磨) り潰し石 Reibstein, 楕円筒形 25.5・20.8・8.0cm, 4.4kg ほか, 平均重量 3.6kg) 66個が出土し<sup>9)</sup>, 盛んに穀物が栽培されていたことを, 裏付けている。

アナトリアから移住し, あるいはその地域からの文化伝播を受け, 他方またバルカン, テッサリア方面から白地に赤色の彩文を付けた土器の製作を継承していた上記の前6500年から前5000年に及ぶ時期のあいだのブルガリア地域カラノヴォの入びとは, 早期農業に起因した移動的生活に続いて, 次第に小路の両側に住居を<sup>つ</sup>重ねて建て, 古小集落 (小村) を形成し, 丘の上の墓地に, 家並みと似た並び方で, 伝統的に埋葬を行なうようになり, 農業の発達とともに, 「家族が住居に居住し, 墓地のある生活」が, 彼らの定住性を強め, 彼らに共通した<sup>アイデンティティー</sup>独自性 (common identity) を伴って生活の基盤をなし, 彼らの心の安定性 (stability of mind) を持続させ, 文化を発達させていた<sup>10)</sup>。ライン, ムーズ両川間の森林地帯におけるメルツバッハ (Merzbach) 溪谷では, 前5500年から前5000年までのあいだに, 小集落の中央に長さ25mにおよぶ大規模な建物が設けられ, それを囲むように, 相互に10mとは離れていない長方形住居のおよそ3棟からなっていた定住は, 各住居が12年ないし30年ほど住まわれて増改築され, この定住地が3, 4代 (1世代約30年) を経て, 溪谷に沿い数 100m

離れた他のグループと一緒にあって、溪谷のローム（砂・<sup>シルト</sup>微砂・粒土の混合）土壌の肥沃なレス堆積層（Lössboden, loess soil of loams）の比較的小規模な耕地でコムギを栽培し、放牧地でウシを飼い、長方形住居6，7棟ないし15棟に居住するに至った諸家族共同態からなる小村定住（Weilersiedlung）が、形成されていた。一族・集落の共同墓地に死者が1体1体個別に埋葬された<sup>ぐんそうぼ</sup>群葬墓の状態に依拠して、住民は7世代ないし13世代を経て、全体で延べ100人を越える人数で住むようになっていた、と推測される。このような定住状態は、ムーズ川の支流ルーア（Rur, Roer）川，ライン川の支流エルフト（Erft）川の溪谷，オランダのリムブルク（Limburg）などの遺跡でも，認められる。当時のこれらの定住の実態は，一般に共同の広場や建物を囲む諸住居の構造・規模・配置などにおいて，特定の住居居住者がまだ経済的に抜きんでて優位に立つことの顕著でない小村（Weiler）であったとみることができる。ネーデルランドのゲーレーン（Geleen）では，前5000年ごろ，レス地帯の川沿いの水郷沃野（Flußauen）で，とりわけオーク混合樹林の脇近くの，樹木がまばらで，樹林が透けていた開豁地（lichter Wald, Waldlichtung, opening）に，5棟の長方形住居（幅6～7 m，長さ30～40 m）に住んだ帯文土器文化民の複数の一族ないし氏族からなる小集落の村落（kleines Bauerndorf）が発達し<sup>11)</sup>，〔図4〕のように，復元されている。前4000年代の帯文土器文化民の集落のなかには，編み枝粘土塗り壁と柱列とを特徴とし，それぞれの住居のあいだに建築構造上大差がなく，それらの切妻屋根長方形住居の内部に，炉や竈を伴う調理場，穀物や道具製作材料などの貯蔵・収納場所，乾燥（干し草）置場，寝室など，部屋の機能区分の行なわれた長方形住居（平均幅5～7 m，長さ25 m，なかには長さ35 mに延びたものもある）の27棟ほどが，これらとそれぞれ組をなすように小建物を付属させ，全体で約3.3haと1.4haほどの2地区の広がりとなす周濠と柵囲いのなかに，おそらく氏族秩序（Sippen-oder Lokalklanordnung）で纏まっていたと推測される村落定住（Dorfsiedlung）が，生ずるに至る。

比較民族学的（komparativ-ethnologisch）・文化人類学的（kultur-anthropologisch）に捉えることのできる人類群最古の生活様式・文化形態に関しては，



〔図4〕ネーデルランドのゲレーンにおける前5000年ごろの帯文土器文化民の村落 (bandkeramisches Dorf von Geleen, Niederlande) の一部分の復元図

(H. T. WATERBOLK und P. J. R. MODDERMANN in: *Palaeohistoria* 6/7, 1958/59, S. 163)

まだ氏族組織 (Clan-und Sippenwesen oder-organisation), 氏族共同態 (Sippengemeinschaft) ないし氏族集団 (Sippenverband) と呼び得るものは存在していなかった, ということができる。<sup>ウアホルデン</sup>原始群 (Urhorden) のもとで, 母・父 (女性・男性) 双系の家族群 (bilaterale Familien) が形成され得ると考えられるが, 野獣狩猟に重きの置かれた<sup>ホルデ</sup>群 (Wildbeuterhorde) では, 狩猟対象である野獣を追って走り回り, 獲物を分け与える処置 (hunting away and down treatments of the game-distribution) とテリトリーの確保への対処から, 父系的傾向 (vaterlicher Zug) を帯び, 父親の死亡に際し, 残された者たちによって, 亡父である被埋葬者に狩猟具をはじめ, 諸道具と多量の肉が副葬され, 女性の死者には, 男女ともに添えられる装身具は別として, そのような副葬品は少ないという内容の事例が, 挙げられる。しかし, 古い時期に単系原理 (unilaterale Prinzipien) は, 存在したとしても, 萌芽的にすぎなった, とみられる。

時が経過して, 諸地域グループ (Lokalgruppen) のあいだで, 一方, 自分たち一族外から配偶者を得る婚姻が確保され, 他方で労働, 生活過程 (Arbeits-und Lebensprozeß) において, 身体的に力を要する樹林伐採・住居建築・土掘り起こしと家畜放牧の農業が発達するに及んで, それに取り組む男性の単系的温床が醸成される<sup>12)</sup>。彼ら男性たちが開墾・農耕・家畜放牧の實際上主な担い手として登場しつつあった際, 原始群のそれまで, 住处, 「営みの火」, 採集・狩猟・漁労, 埋葬などの生活の場で纏まっていた従来の共同態的關係に, さらに耕地, 牧草地, 放牧地に係った生産の場で纏まる新たな共同態的關係の側面が加わることになった。原始群のもとで, 血族・親族・一族關係ないし血族・親族・一族 (blutsverwandschaftliche, verwandschaftliche, anverwandschaftliche Verhältnisse und Verwandtschaft, Geschlecht) の生成による原始群の内的組織化 (定住主体の「細胞分裂的」確定化 die Stabilisierung des Siedlungssubjekt durch „die Zellteilung“ der Urhorden, stabilization by „cell-division“ in the inside of band) と原始群のいわば「原形質的」変化 (die Veränderung des Protoplasmas der Urhorden, protoplasmatic change of band)



を<sup>きた</sup>来して、土地の農業への利用が行なわれ、原始群の先占（占取・占領 Okkupation 〈lat. occupatio 〈capere, 先占取得 Aneignung〉）していた縄張り地域に、原始群を構成していた複合大家族<sup>13)</sup>である1棟ないし複数棟の住居居住者たちを内包し、共通の祖先から出自すると信じたであろう親族ないし氏族共同態の成員が、開墾地を整え、放牧地・採草地を備え、縄張り地域の一部分を占有（Besitz, 事実上の占拠 tatsächliche Umfassung）し、その個別的利用の進行によって、占有地の専有化（Appropriationierung）に向うに至った。そこでは、人びとは確かに生物固体として住居のなかで道具を作り、住居近くの小地面で穀物を栽培し、住居の脇や一部住居内で家畜を飼っていた側面がないわけではなかったが、しかし道具の材料を、血縁と相互の支え合いで纏まった家族・親族（Verwandtschaft）・一族（Geschlecht）などで調達し、工法・図案・文様の<sup>そえつけ</sup>添付も一族的、小集落的伝統の継承のもとにあり、住居の建築や先占地内の開墾地・放牧地・採草地の設定と拡張が、親族・一族・氏族（Clan, Gens）によって行なわれると、これらの共同態が、先占された土地に対する共同の部分的な占有および専有の主体（das gemeinschaftliche, gemeinsame Besitz-und Appropriationssubjekt）となるに至っていたのである。

近隣共同態との交流・交渉過程に、外婚制と農業生産の主体として確かな地歩を獲得しつつあった氏族共同態<sup>14)</sup>（親族仲間 Verwandtenkreis の一部を含む）は、いまや出自・労働主体の共同態（Abstammungs-und Arbeitssubjektsgemeinschaft, 母系子孫群 Clanschaft, 父系子孫群 Gens）となり、その組織化が母系・父系の単系（unilateral, entweder matri-oder patrilinear）に一層整序される傾向にあった（単系的出自集団リネージ, リニイジ lineage）。それぞれの<sup>ローカルクラン</sup>地域氏族（Lokalklan）の外婚が父・母（男性・女性）の二つの系をそれぞれ血族〔関係〕（Verwandte, Blutsverwandtschaft, consanguinity, bloodkindred）と姻族〔関係〕（Verschwägte Verwandtschaft, Verwandtschaft durch die Heirat, juristische Verwandtschaft, affined kinship, in law-schip）に分ける。地域や集団によって、それらのメルクマール（merkmal, mark 指標）は多様に現れ、早期には母系・父系の発達が交錯さえした場合もみられたが、上記のよ

うに、血縁と出自を紐帯とし、おそらく若干の非血縁者をも内包し、いまや利用地の占有・専有主体であり、共通の始祖を辿り得ると信じた彼らは氏族、一族、親族、血族などの小共同態が、原始群共同態内部に、次第に明確な形をとって発達し、その強い相互扶助の血縁・出自性が群内外の秩序と紛争を規律する一つの要素となっていく（後代のフューデ indeurop. \**peik-*, *poik-* "feindselig", germ. \**faihido*, ahd. *fēhida*, mnd. *vède*, deut. Fehde, engl. feud, Selbsthilfe gegen Straftaten)。このような経済社会的発達のもとで、住居居住に看取されるいくつかの小家族の結合組織は、氏族・親族に含まれ、支えられ、住居内において、炉に<sup>とど</sup>居し、土器で煮炊きし、若干の食物の貯蔵、道具とその製作材料の収納を行ない、他方で集落や氏族共同態の共同の貯蔵場所や広場をもち、これらを利用して、機能していた。原始群の小集落（小村）ないしそれを構成するいくつかの氏族共同態の纏まり（共同集団、<sup>かた</sup>固まり settlements, establishments）が祭祀・平和集団（Kult-und Friedensverband）をなすに至る。家族の住居居住、一部住居内での埋葬、住居構造、祭祀の祠、複数の住居の纏まった配置、小集落における祭祀場所などの形跡から、祖先崇拜（ancestor worship）、祖先観の発達と出自（血筋・家系）原理（principle for lineage and descent）の生成によって、定住的性格の強められていたこと<sup>15)</sup>が、認められる。なお、小集落のなかで、親族・氏族共同態は、他の氏族共同態とともに、それぞれ農業生産活動と先占地域の部分的な占有・専有主体となるに至った段階においては、経済社会的に、先占地域である土地の「総有」に対して、「共同所有」（共有 Gemeineigentum）という形態の土地所有に係わる氏族共同体であると表現され得る。アルトヴァイラー定住形態の定住主体（Siedlungssubjekt）は、アルドヴァイラーを構成した諸親族・氏族共同体が、その労働過程において、共同所有地のなかに、占有地を確保して、これを個別に利用し、専有する、このような労働・生産主体のあり方、つまりその労働・生産手段との結び付きのあり方によって、諸親族・氏族共同体間の労働力差異の生ずる前夜の原始共同態時代（die Urgemeinschaftliche Zeit, the primary community ages, 原始時代）の末期をもたらしている。

住処、「営みの火」、子供の養育で纏まり、自然物の計画的獲得貯蔵を行ない、土地を農業生産活動に利用する氏族共同体の生活は、早期の作物栽培（農耕・耕種）の生産経営（Produktionsbetrieb, 生産経済 Produktionswirtschaft）を内部で営み、外婚制をとるいくつかの氏族共同体群である胞族（Phratry, phratry 〈gr. (Gk.) φρατρία 同じ仲間・同類としての共属感のもとに、親密に結び付き合う親族・氏族集団の集合体）の社会形成の前提をなし、そこに生活する共属者が、共通する祖先の子孫・一族ないし関係者であるという出自・共属意識を持ち、原始群のなかで、それぞれ纏まって生活を行なうに至った。これらの氏族共同体は次第に一層、生産主体の様相を呈し、沖積世（完新世）の新石器時期（Neolithikum, Jungsteinzeit）の紀元前6000年ないし前5500年から前4600年、ところによっては前3200年ごろ以降、それぞれの地域性を伴いつつ、土地を、掘り棒・鍬・鋤による耕作、コムギ（*Triticum*, Weizen）・オオムギ（*Hordeum*, Gerste）栽培の耕地、またヒツジ・ヤギ・ブタ・ウシ飼育のための放牧地、採草地などの農地として利用し、もっぱら生活資料を生産する農耕・作物栽培者、家畜飼育者の生活を営み、定住生活に入<sup>はい</sup>っていった。語源学の研究成果によれば、おそくとも新石器時期の新層の前4000年から前3000年のあいだには、インド＝ヨーロッパ語族（indoeuropäische Sprachfamilie, Indo-European family, -languages）の農耕と家畜飼育についての関係語が確実に存在した、と措定されている<sup>16)</sup>。

ザーグロス山麓、クルディスタン高原、アナトリア半島、地中海東岸などの穀物・家畜・農業技術などの影響を受けて発達した初期新石器時期の農耕・作物栽培、家畜飼育のカラノーヴォ・スタルチェヴォ・ケレス文化に、自分の文化の起源の一つをもった帯文土器文化民は、甕・壺・浅皿・深皿・浅鉢・深鉢・<sup>ビーカー(コップ)</sup>杯などの土器の貯蔵・煮沸（煮炊き）・盛り付け用の<sup>てづく</sup>手捏ね成形・焼成の製作工程は勿論、渦巻き、雷文（波形渦）などにわたる刻線文の添え加えの表現に至るまで、さまざまな創意工夫を凝らしていた。黎明期<sup>れいめいき</sup>の人びとの自然環境状態（natürliche Umweltverhältnisse）への直接的依存が変化した。それまでの野生動植物の生息・生育と採集・狩猟・漁労の自然的状況の巡り合

わせ (Sammel-Jagd-und Fischfangsglücke) に左右された採集・狩猟・漁労者の生存基盤 (Existenzgrundlage) と対照をなして、農耕・家畜飼育民の農民的経済生活 (die bäuerliche Wirtschafts-und Lebensweise der Feldbauern und Viehzüchter) は、「母なる自然」 (natura mater, Mutter Natur), 「母なる大地」 (terra mater, Mutter Erde), 「大地の女神・地母神」 (tellus) の自然景観 (Naturlandschaft) のなかにあつて、自分たちの労働によって大自然に働きかけて、生活資料を生産するその労働過程に、移住・定住に対する樹林繁茂の<sup>はば</sup>阻みを、伐採・開墾によって<sup>しの</sup>凌ぎ、森林原野の一部において、作物栽培のために、森林・荒れ地・湿地を開拓して、耕地、また放牧地・採草地 (Weide-und Wieseland), これらの農地に位置づける諸契機を作り出し、これによって暮らしを一層確実な基盤の上に立てることになった。人びとは、そのような合目的活動の労働力投下によって、道具・種子・家畜などの労働対象 (Arbeitsgegenstände) と区分・区画され得た土地 (土砂の乗った地盤を伴う地面 Grund und Boden) ・耕地 (Ackerland) ・放牧地・採草地の労働・生産手段 (Arbeits-oder Produktionsmittel) を<sup>そうしゅつ</sup>創出し、これらを用いることによって、土器の文様と同様、創意工夫に基いた暮らしが、比較的安定化に向かう運びとなった。

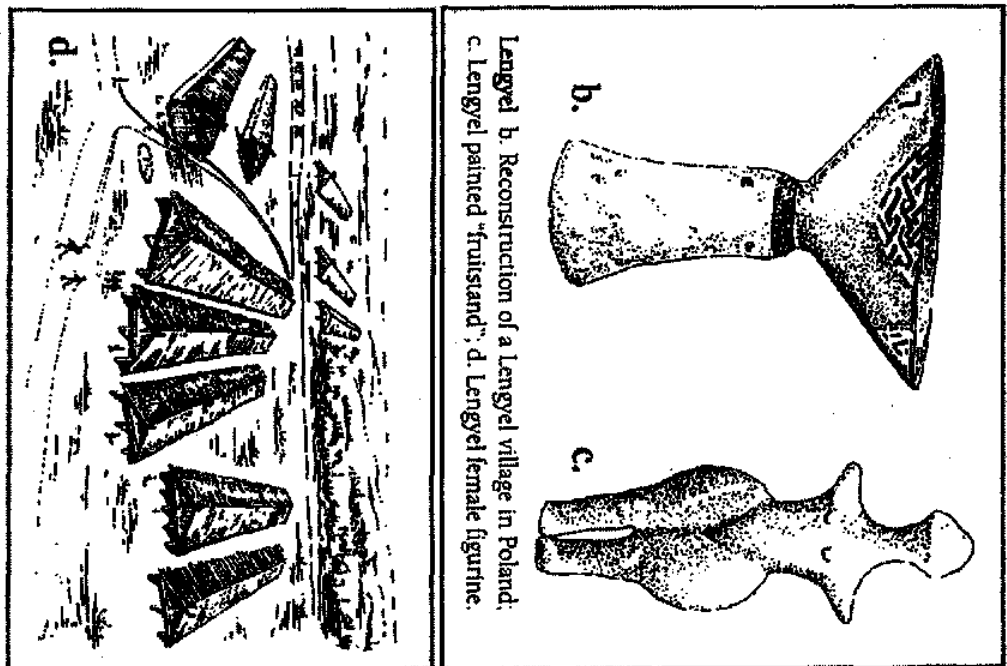
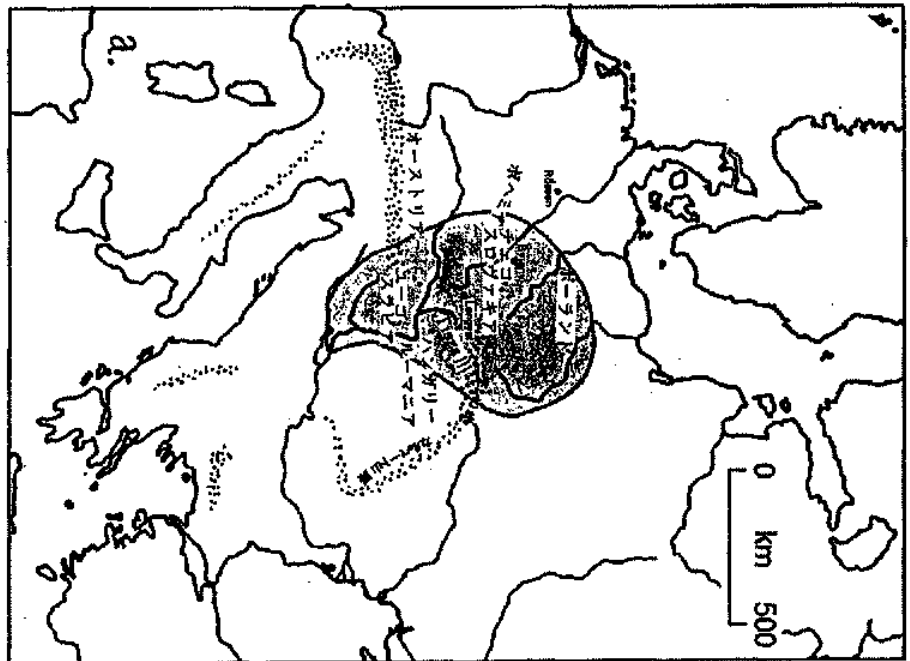
そこでは、農耕・家畜飼育民の経済生活とその労働過程の第1の特質として、彼らの需要を、主に自分たちみずからの活動によって相当部分、間に合わせ、調達する自給自足的な現物経済 (autark [isch] e Naturwirtschaft) であった点が挙げられる。そして、とりわけヨーロッパ地域における新石器時代の農業は、焼き畑の灰土、野草・芝土の緑肥と並んで、放牧地の部分的耕地化、住居内の家畜部屋・別棟の家畜小屋での家畜の糞尿・敷き<sup>わら</sup>糞腐熟の<sup>きゅうひ</sup>厩肥 (barnyard manure), 堆肥の利用など、農耕・穀物栽培と家畜飼育の両者が結び付いて営まれ、施肥と土壌作りが行なわれ、このように、土地を耕やし、穀類の種子を蒔く耕種・穀物栽培に畜産の結合した混合農業 (Mischagrikultur) であったことが、特徴的である。農耕・家畜放牧飼育の技術・熟練を継承し、その担い手となり、収穫物貯蔵、祖先祭祀と墓地などで纏まった氏族・複数の住居に分か

れて住む複合大家族の、開墾・播種・収穫、雄の種家畜の保持、放牧から祭祀に及ぶ経済社会組織としての生産主体および集落内の生活単位としての登場によって、労働の生産性 (Produktivität der Arbeit) の漸次<sup>ぜんじ</sup>の上昇と原始群社会の組織化が進むことになった。その経済生活と労働過程の第2の特質は、彼らの日常生活自体において、耕起・播種・収穫・飼料与え・放牧などのあいだに、他の仕事とそれに従事し得る時間がわずかながら確保され、亜麻の茎皮繊維・羊毛を原料として縫<sup>と</sup> (撚) りを掛け、糸を作り、手動紡織<sup>ほうしよく</sup> (handspinnen u.-weben) の紡錘 (Spindeln) と機織り台 (Webstuhl) を製作・利用し、衣服の布が織られるなど、活動の新たな細分化が進み、さまざまな製品が作られた点にある。このような手仕事の技<sup>わざ</sup> (handwerkliche Fertigkeiten) は、土器の製作 (Irdenwaren-od. Tongefäßen-Machen Topferei) にも現れ、自然界には存在しなかった比較的不透水性と耐久性のある容器が、貯蔵・調理用、さらには骨壺用 (後述の die Rossener Kultur) にまで作られ、多様な形状と文様の造形美が、小集落や地域における伝統となって、継承されるに至った。人類の経済・文化諸形態のこのような明確 (決定的) な発達 (definite developments) は、ヨーロッパ地域では、レス・黒土土壤 (Löß-und Schwarzerdeböden) 地帯の全域に、上記のように、初・中・後期新石器時期の前5000年代から前4000年代に、帯文土器と磨製靴型石斧 (polished shoe-last stone celt) ・手斧<sup>ちような</sup> (adz[e]) を製作・利用した農耕・家畜飼育民の活動によって進められていた。

帯文土器を伴う農業文化の発達は、ドーナウ、エルベ諸川流域のさまざまな文化の発達のもとに、レス・黒土土壤のさらに新たな耕地・放牧地化を促し、住民増加をもたらした。チェコ、スロヴァキアのスデーテン (Sudeten) 山地の裾野<sup>すその</sup>およびパンノニア (Pannonia) 平原を中心に、ドーナウ川流域のレンジェル (Lengyel) 遺跡を標準遺跡とする前5000年から前3400年ごろまでの、初・中・後期新石器時期に属し、刻線帯文土器を伴うレンジェル文化 (die Lengy[e]ler Kultur, Lengyel culture) が発達し、ボヘミア、ハンガリー、オーストリア北東部、ドイツ南東部、ポーランド南部に広がった。インド=ヨーロッパ系諸部族 (Indo-Europeans) のドーナウ、エルベ、ヴィスワ諸川流

域に住んだ人びとに担われたとみられる<sup>17)</sup>刻線文土器に、このレンジェル文化では、黒色の表面が研磨され、部分的に赤・白・黄色に彩色されたものも生じ、磨製靴型石斧、黒曜石製鎌が製作・利用され、コムギ、オオムギが栽培収穫され、ウシの飼育が優勢となり、ブタ、わずかにヒツジ、ヤギも飼われていた。長方形・台形 (trapezoidal) 住居群からなる集落近くに、<sup>かこ</sup>囲った場所があり、祭祀が行なわれ、祭祀用容器 (cult vessels)、女性像の土偶 (eathen female figurine) が出土している ([図5] b.c)。複数の小集落の集まる定住地には、道が通じ、小集落は掘り溝で囲まれていたものとそれのない開放集落 (ditch-enclosed and open villages) があった。死者は小集落の大きな共同墓地 (cemeteries) に屈葬 (flexed inhumation) され、男性の被葬者には頭蓋骨が欠けていたり、顎 (jaw) 部分のところにブタの下顎骨 (mandible) が置かれていた場合があった。他部族ないし小集落住民との戦闘と彼らの精霊観が推測される。レンジェル文化をもつ集落には、堡 (防) 塁 (砦 fortification) で固めたものが生じていた点は、新しい傾向である。

ヨーロッパ地域へ最も早期に農業を伝播させた帯文土器文化民のビラニイ、ケルン=リンデンタール (Köln-Lindenthal) などの遺跡内容に代表される文化をドーナウ (川流域) 初期新石器・新石器第1期文化と呼ぶことができ、焼き畑農耕の発達、長方形・台形住居の建造、囲い柵・壁のある集落定住の出現などを特徴とする。これに続くドーナウ (川流域) 新石器第2期文化には、レンジェル、レッセン (Rössen) 両文化が含まれる。ボヘミア、ザクセン地域において、渦巻き・雷文 (波形渦) の刻線帯文土器から水平線・菱形・チェス盤目 (市松模様) 状の刺突帯文土器 (Stichbandkeramik) への推移がみられ、この刺突帯文土器文化 (c. 3900-3300 B.C.) の担い手は、エルベ川の支流ザーレ (Saale) 川流域を中心に、バイエルン地域にも定住し、ヨーロッパ地域の南東と北西の文化の仲介者として、文化内容にとりわけ石製 <sup>くさび</sup>楔 (Steinkeil)、<sup>つちおの</sup>槌斧 (Steinhammer) を有し、重粘土質を含む砂質湿地にも定住地を設けて定住し、刻線帯文文化に続いて発達する諸文化の基盤を <sup>かたち</sup>形 作った<sup>18)</sup>。同じ頃、オーベルライン・ネッカー川流域北部に、刺突帯文土器と関連を保持した巨石記念物



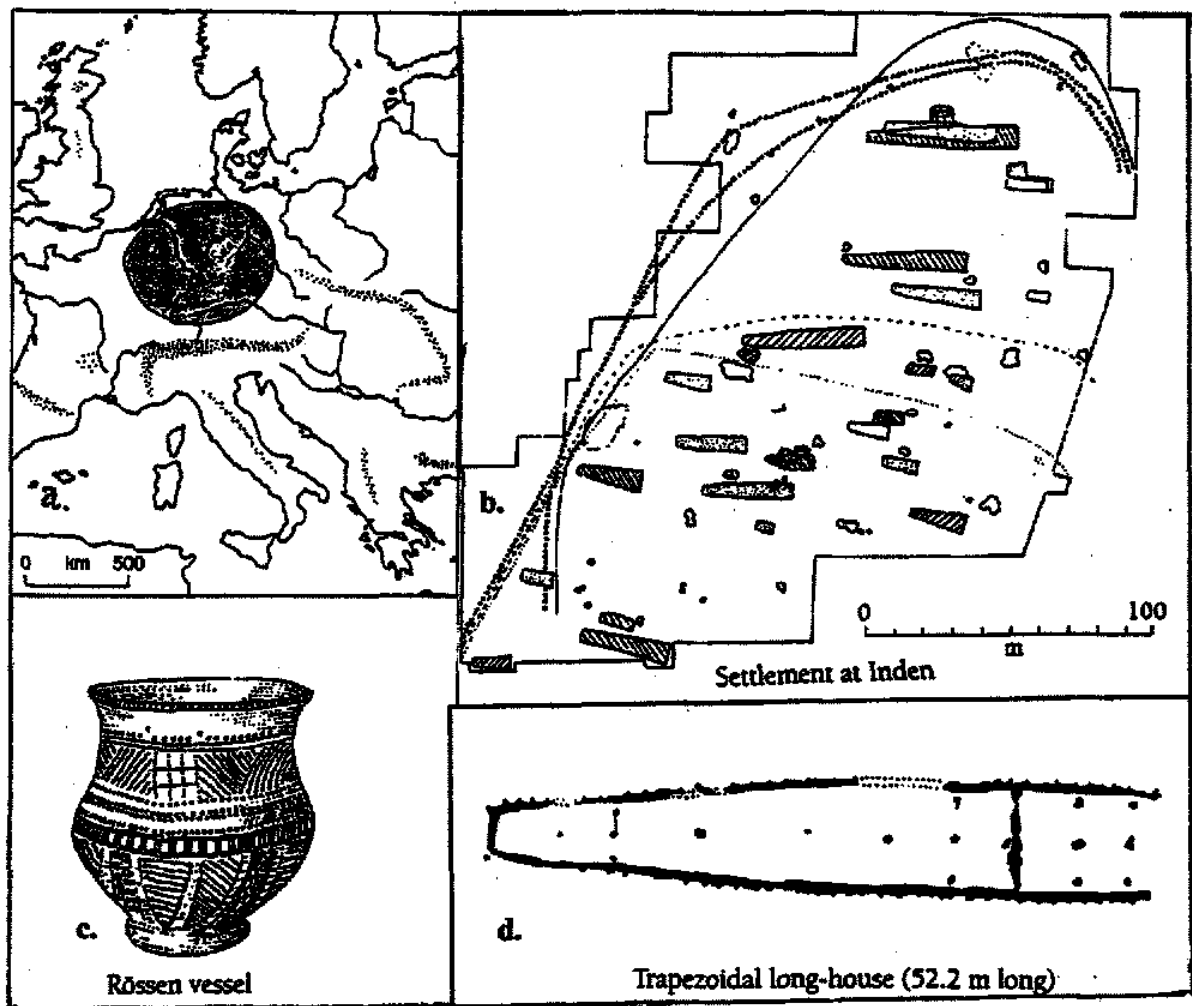
Lengyel b. Reconstruction of a Lengyel village in Poland.  
c. Lengyel painted "fruitstand"; d. Lengyel female figurine.

- a. 分布地域 b. 彩色土器杯 (いわゆる果物入れ台 "fruitstand") c. 人形土偶 (earthen figure, 陶土女性像 female figurine)  
d. ポーランド地域におけるレンジェル集落 (Lengyel village) の復元図

〔図5〕 レンジェル文化 (Lengyel culture) (J. P. Malloy, D. Q. Adams, *Encyclopedia of I.-E. Culture*, 1997, p.359 に基づき作成。)

(墳墓)・石塚墳墓群 (——文化 die Megalithmonumente, Hinkelstein-, Großstein-Hünengräber [gruppe] Kultur) が現れ、ライン川両岸を北へ広がったグロースガルタッハ文化 (die Großgartacher Kultur) に統合されていく<sup>19)</sup>。初期新石器時期末から中・後期新石器時期には、エルベ川、その支流ザーレ川流域からライン川流域にかけて、ライン、その支流マイン (Main) 両川流域のグロースガルタッハ文化に、部分的に起源を有し、住居形態が刺突帯文土器文化後期の形態に属するとみられている、ライン、マイン両川合流点流域、ライン川の支流ネッカー (Neckar) 川流域、バイエルン地域のドイツ中・南部、さらにスイス、フランス北東部に及ぶレッセン文化 (die Rössener Kultur, Rössen culture c. 4500/3600-3200/3100 B.C. [図6]) が、刻線帯文土器文化の後継文化として発達し、バイエルンのメルセブルク (Merseburg) 近傍のレッセン墓址を標準遺跡として名付けられたその文化をはじめ、諸々の地域文化が発達した<sup>20)</sup>。細分されてシェーンフェルト文化 (die Schönfelder Kultur) と呼ばれているドイツ東部のヴァーリッツ (Wahlitz, Kr. Burg, Bez. Magdeburg) 丘の斜面における定住は、住居群近くの粘土を地面に打ち固めた屋外の床場所に、燧石 (火打ち石, フリント flint) で火起こしをし、共同で利用される炉とパン焼き窯<sup>がま</sup>があり、また家畜化されたオーロックスの歯の破片が残り、いまやその家畜化が認められ、6棟の比較的大規模な長方形住居 (幅6~7m, 長さ9~25m), 9個の小規模な付属建物, そして住居内と周辺との円・楕円形貯蔵穴 (直径1.5~2.0m穴のなかおよび置かれていた容器に、エンマ (一) コムギ, 二粒系コムギ, ヒトツブコムギが蓄えられていた) などのこれら全体が、垣根と掘り溝で囲まれていた<sup>21)</sup>。この地域一体で、そのような複数の早期の<sup>ヴァイラー</sup>小村<sup>が</sup>結び付き、レッセン村落群 (die Rössener Dörfer) が成立していた。すなわち、主に農耕、コムギ、オオムギの栽培とウシ、ブタの飼育に、野生のオーロックス、アカシカ、ノロジカ、イノシシの狩猟の加わった経済生活を営み、その定住は、ところによっては竪穴式住居居住も残されていたが、一般に台形・舟<sup>ネーフ</sup>形・長〔方形〕住居 (trapezförmiges, schiffsartiges Langhaus) からなる小集落群であった。土器には帯文土器系統の半球形小鉢・皿などと、ヨーロッパ北

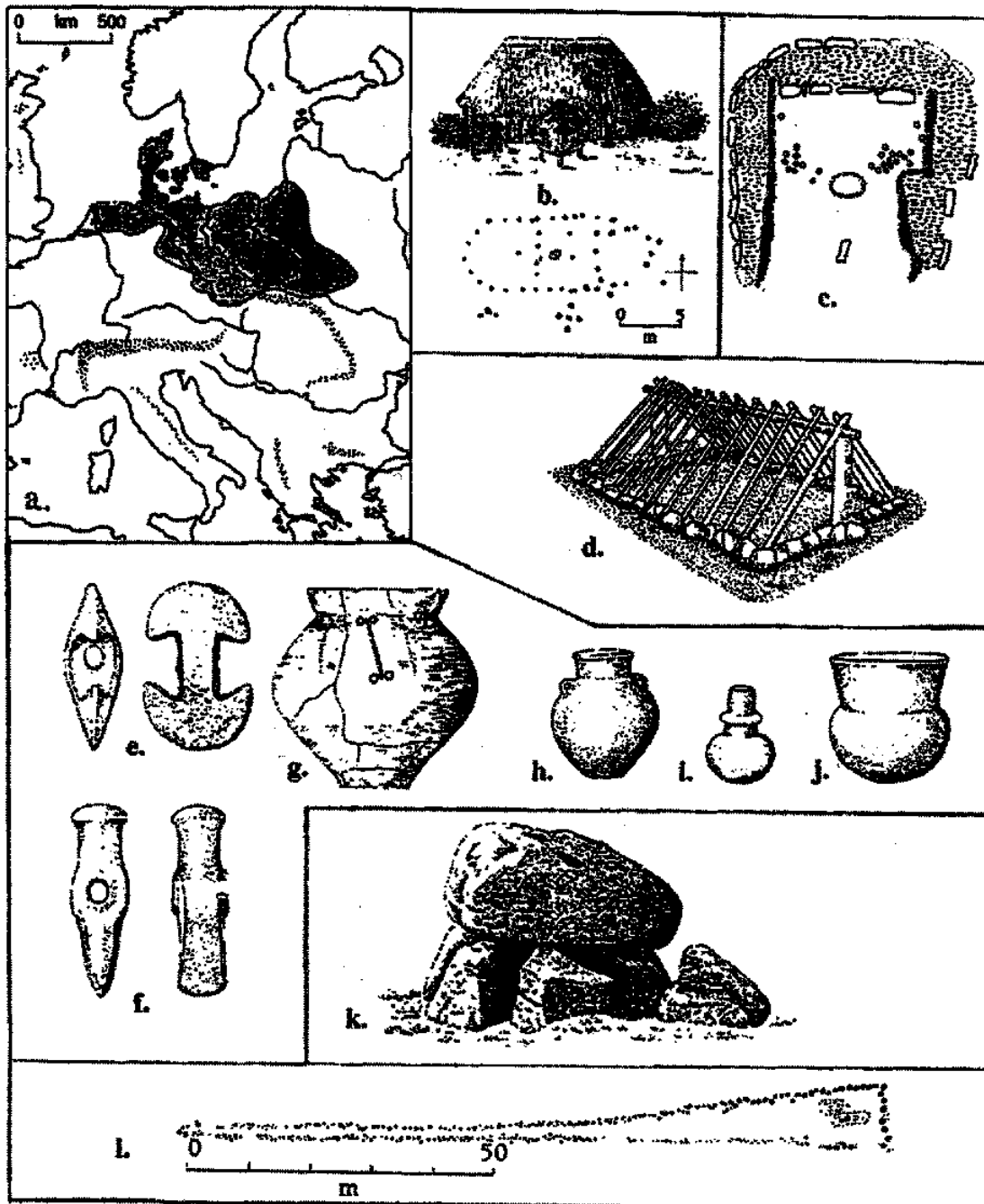




a. 分布図 b. 囲い・堡塁で固められた Inden の集落 c. 先行の土着の刻線文を継承し、東方からの I.-E. 語族民の刺突文を伴う壺 d. 台形・長〔方形〕・舟形住居

〔図6〕レッセン文化 (Rössen culture) (J. P. Malloy, D. Q. Adams, *E. of I.-E. Culture*, 1997, p.489 に基づき作成。)

西部に広まった巨石記念物（墳墓）文化（〔図7〕）の刺突列点・鋸齒文幾何学的文様などの沈文（押印・凹み文）土器（pitted ware）、漏斗（じょうご、ファネル funnel）状（の首部分付き）<sup>ビーカー（コップ）</sup>杯（Trichterbecher=TRB, 'Funnel-necked-beaker'）土器系統の広口台付き甕・壺などが挙げられ、両者の融合型も現れ、石器は燧石素材の帯文土器文化期の石器、とりわけ靴型石斧が、先行した帯文土器文化から継承されていた。各集落近くの共同墓地（gemeinsamer Friedhof, Totenacker des Weilers; common burial ground or cemetery was known near village settlement）に、死者はたいていそのそれぞれの家族墓ないし個別墓（Familien-oder Einzelgrab）へ、土葬（Totenkörpererdeübergebung, Totengrablegung, -bestattung oder -beerdigung; burial, interment or inhumation on earth grave）で、墓穴に膝を曲げて、安息の姿勢か、ある方角に顔を向けるか、わざと人為を加えるかした横向き葬（turning sideways burial）、<sup>あおむ</sup>仰向け葬（<sup>ぎようが</sup>仰臥葬 supine burial）、うずくまった姿勢をとらせた<sup>そんそう</sup>蹲葬（crouch burial）などの屈葬（Höckergrablegung, bend or stoop burial）、背筋を伸ばし、腕を伸ばしたり、軽く折り曲げて腹部に当てたりした姿勢で安置された仰向けあるいは横向きの身展葬（extension burial）が行なわれ、チューリンゲン、エルベ川流域の北ザクセン、ライン川流域などの若干の地域では、火葬（Leichen-und Totenverbrennung oder -feuerbestattung; funeral, cremation）が行なわれ、遺体や遺骨（Totengebeine）、骨壺（Totenurne）を埋葬した土壙を部分的に石板で覆い（石蓋土壙墓）、墓塚（墳丘 Totenhügel）を造った墓も現れた。それらの死者に刺突帯文土器の<sup>ビーカー（コップ）</sup>杯、装身具などが副葬され、飲食と装束が整えられて、いくつかの家族墓ないし個別墓全体で墓地をなしていた。成人女性や娘の副葬品の大理石製魔よけ<sup>プレスレット</sup>腕輪は、その石材が25km余離れた所のもので、このように装身具のなかにはレッセン文化の地域における岩塩との交換によって得られたと推測されているものがあり、集落ないし集落群の主たる自給自足的現物経済にもかかわらず、それらの副葬品に依拠して、それらの財物（properties）は交易の発達によっていたことが、認められる。なお、ヴァーリッツ遺跡のなかに、人体が焼かれて丁重に埋葬され、



a. 分布地域 b. Wittenwater の住居・貯蔵庫跡と復元図 c. Tustrup の祭祀・葬儀場所 (Ritual structure) d. 貯蔵穴 (Grave construction) e, f. 石製戦〔闘用〕斧 (Stone "battle-ax") g. 四輪車文付きといわれる漏斗状壺 (TRB pot with wagon) h. 両取手付き漏斗状壺 (TRB pot) i. 漏斗状筒形「ミルク瓶」 (TRB "milk flask") j. 漏斗状広口ビーカー (TRB funnel beaker) k. 巨石記念物・墳墓 (Megalithic monument or tomb) l. ポーランドの長い墓塚 (Long barrow, 古墳 tumulus)

〔図7〕漏斗（じょうご）状杯文化（Trichterbecher or "Funnel-necked-beaker" = TRB culture）と住居形態・石器・土器・墳墓（J. P. Malloy, D. Q. Adams, Encyclopedia of I.-E. Culture, 1997, pp.596 に基づき作成。）

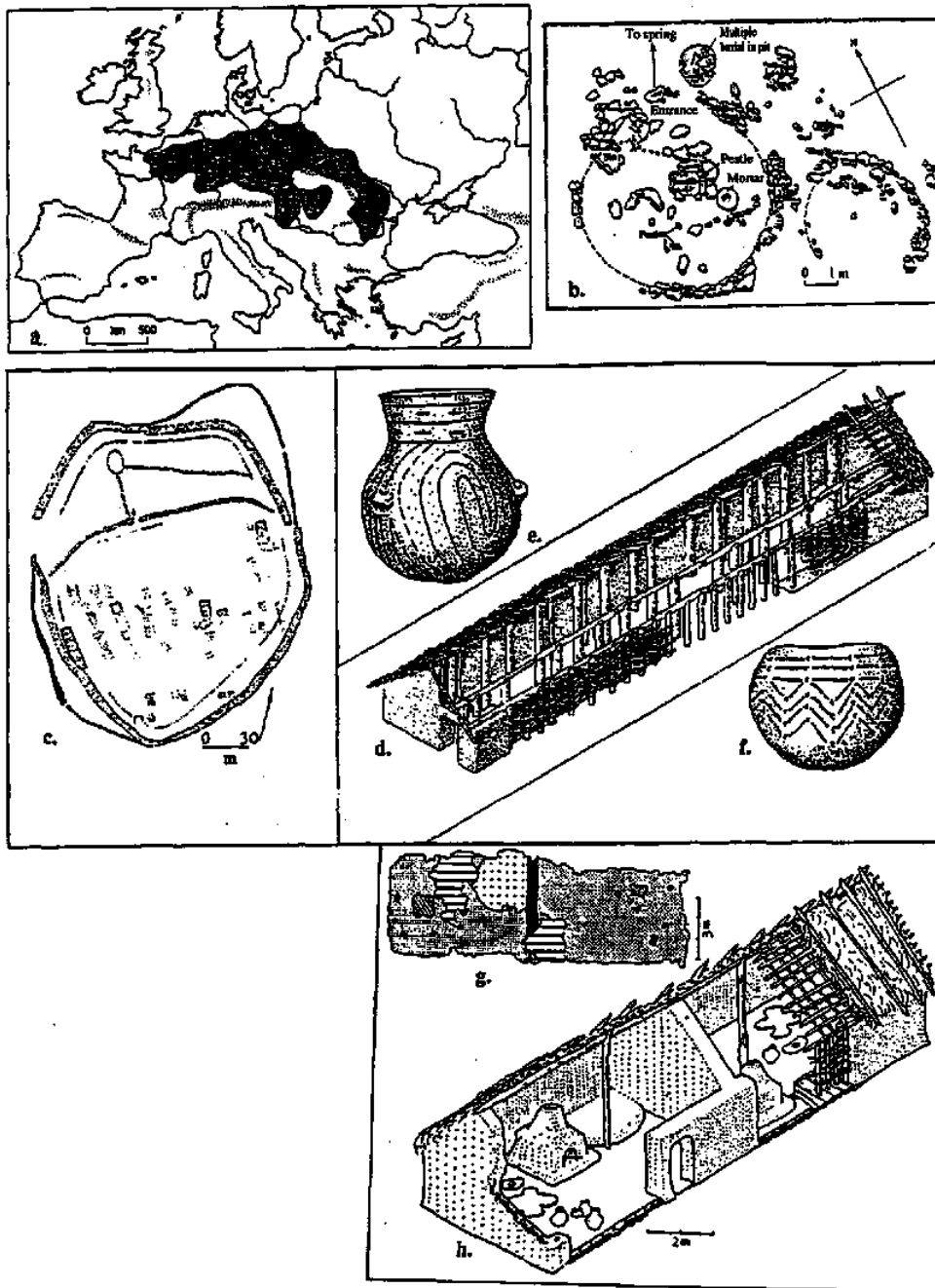
道具の焼かれて添えられた形跡があり、これらは犠牲として供えられた供犠きょうぎ(くぎ) (Opferhandlung) であった、とみられている。

エルベ、ザーレ両川領域とアルトマルク (Altmark), 南西ドイツ地域からヴェストラインーニーダーラインに諸定住とその文化の広がりを生んだレッセン文化の担い手は、その経済・定住様式 (Wirtschafts-und Siedlungsweise) を含めて、帯文土器文化の継承者であり、西方のアーヘン近傍アルデンホーフエルの平坦な山頂 (die Aldenhover Platte bei Aachen) における定住でも、住居の基礎平面が台形で、長さ数10mの住居 (trapezförmiger Grundrißform des Hauses) とそれに付属する農舎 (Wirtschaftsbaute) からなる村落定住 (dörfliche Siedlung) が発達していた<sup>22)</sup>。また、あまり肥沃でない軽質土壌のドーナウ川流域の他の住民の平地定住 (Flachlandsiedlung) では、杭棒柵くいぼうさくないし防御〔用〕掘り溝 (Pfostenzäunen oder Palisadengräben) の村柵が設けられ、比較的家畜飼育に重点を置いた定住では丈夫な放牧地囲いが施されていた。レッセン文化は、ヨーロッパ東・中・北西部への新石器農業文化の拡大を背景にもち、新石器時期の推移のもとで、その一部の担い手、すなわち東方からのインド=ヨーロッパ語族の文化を経験した人びとが、この地域においても、時に (occasionally), ステップ文化にとって典型的であった場合のある半地下住居 (semi-subterranean dwellings) を割り込ませるように定住地にかんにゆう嵌入させ、丘の頂きに堡壘定住 (fortified settlements) を設けた定住形態をも残しつつ、次第に先住土着の非インド=ヨーロッパ系諸部族のなかへ根をおろし、西方におけるインド=ヨーロッパ語族の部族社会を発達させたと推測される<sup>23)</sup>。レッセン文化では、柵・掘り溝・堡壘などの防御施設で固められた集落が、特徴的となった。

これらのドーナウ川中流域住民とヨーロッパ中部地域住民との文化接触過程のなかから、ドーナウ川流域文化群 (donauliche Randkulturgruppen), とりわけレンジェル文化周辺文化群 (Randkulturgruppen der Lengyelkultur c. 3400-2900 B. C.) として、ニーダーバイエルンのミュンヒスフオーフェネン文化 (die Münchshöfener Kultur), バーデン=ヴェルテンベルクのアイヒビ

ュール文化 (Aichbühl K., nach der Siedlung im Kreis Biberach, Baden-Württemberg), シュヴィーベルガーディングン文化 (Schwiebergerdingen K.), シュッセンリート文化 (Schussenried(er) K., nach der Flur im Federseemoor), エルベ, ザーレ両川流域のゲーテルスレーベン文化 (Gatersleben(er) K.) などが生成した。これらは, ライン上・中流域の地域グループ化した広範にわたる諸々の文化と結び付き, レッセン文化に続く刺突帯文土器後期文化の発達を促し, 新石器時期中期 (Mittelneolithikum, 3200-2400/2300 B.C.), 後期 (Jung-oder Spätneolithikum, 2400/2300-1800 B.C.) へ移行していく。

以上の前5500/4500年ごろから現れたヨーロッパ初期新石器・刻線帯文土器文化民 (Europe's early Neolithic Linearbandkeramikculture-folk) について, 分布地域, 定住の実態, 労働対象との関わりの面から総括するならば, 泉, 水流とオーク混合樹林脇の多少なりとも肥沃な土地のもとで, 動植物とこれまた自然の一部である人びととの「集合」 ('aggregation' of plants, animals and people at oases, rivers and fertile land) のなかから, それまでの自然物採集・獣鳥狩猟民の生活 (gathers-hunters) の食糧採集取得 (food-collecting way of life) から, それを若干残しつつも, 作物栽培・家畜化 (domestication) を創出した農耕・「家畜群の世話」を行なう農民 (farmers-herders) の生活へと進み, 一層季節の移ろいに応ずる栽培・飼育に基づいた小集落定住の暮らし (more seasonality and subsistence of small village 'weiler' settlement, based on plant cultivation and stock breeding way of life) を営むに至った。[図8] に示されるように, 刻線帯文土器文化の広がり, ヨーロッパ温帯地域における新石器文化分布の広大な部分をなし, 東はルーマニア, ウクライナ, 西は北フランス, ネーデルランド, ベルギーへ広がり, それを継承するレンジェル, レッセンなどの地域文化を発達させていた。それらの遺跡・遺物から, ヨーロッパ温帯レス土壌地域を求めて定住を行った広範にわたる初期農民小集落が, 証明される。すなわち, 住居形態は東方, 西アジアの円形からヨーロッパ東・西部の長方形に変わり, 一般に幅6 m, 長さ20 mから45 mに及



a. 分布地域 b. 円形住居参考例（西アジア, Mallaha の炉・モルタル材料・杵を伴う早期農業家族住居と集合理葬墓穴） c. 掘り溝・柵で固めた Köln-Lindenthal の集落 d. 長方形住居復元図（Long-house from Bylany, Czech Republic, 30 x 6m）  
e, f. 刻線帯文土器の壺（LBK pot） g. 長方形住居跡 h. 復元図（新石器時期 c.5500 B.C. ヨーロッパ東部の農民住居）

〔図8〕刻線帯文土器文化（Linearbandkeramik = LBK, the Linear Ware）と住居形態  
 (J. P. Malloy, D. Q. Adams, *Encyclopedia of I.-E. Culture*, 1997, pp.354; E. Delson, I. Tattersall et al. [ed.], *Encyclopedia of Human Evolution and Prehistory*, 2nd ed., 2000, pp.476 に基づき作成。)

ぶ規模で、台所兼居間、貯蔵部屋など機能区分され、1棟ないし複数棟に複数家族の居住できる構造であり、同時にそれぞれの住居は居住者たちの居場所 (dwelling and living home-area) であり、また屋内の仕事場でもあった。定住はそれらの住居の5棟から10棟ほどよりなり、外部に対して比較的開放的なもののほかに、掘り溝・柵などの防災・防御施設 (secure facilities of prevention against disasters and defence against foreign enemies) をめぐらした小集落が築造されるに至った。栽培された作物は主にコムギ (*Triticum monococcum*, *T. dicoccon*, *T. aestivum*, *T. spelta*), 初めは少なかったがオオムギ (*Hordeum vulgare*), キビ (*Panicum miliaceum*), わずかにライムギ (*Secale cereale*), オートムギ (*Avena sativa*), その他にエンドウ (*Pisum sativum* L.), 草エンドウ (*Lathyrus sativus*), レンズマメ (*Lens culinaris*), 亜麻 (*Linum usitatissimum*), 時に麻 (*Cannabis sativa*, hemp), さくらんぼ (*Prunus*), セイヨウサンシュユ (*Cornus mas*) などであった。飼育された家畜は主にウシ, 他にヒツジ, ヤギ, ブタで, 家犬は少数であった。狩猟が行なわれ, 狩猟された野生動物のうちの多くはアカシカ (*Cervus elaphus*), ノロジカ (*Capreolus capreolus*, roe deer), オーロックス (*Bos taurus primigenius*), イノシシ, ウマ, ビーバー (*Castor fiber*), アナグマ (*Meles meles*), オオカミ, キツネ (*Vulpes*), ノウサギ (*Lepus*), ハムスター (*Cricetus cricetus*) などであった。これらの栽培されたコムギ, オオムギなどの穀物は, マメ, 亜麻などとともに, 食糧として栄養価が高く, 比較的貯蔵が利き, またウシ, ヒツジ, ヤギ, ブタなどの飼育によって, 継続的に肉が供給され, 季節に応じて, ウシ, ヤギの乳から, 生きものが保存し, 供給する状態で, 高い栄養分が得られた。農業 (farming, agriculture) が上記のように農耕・作物栽培と家畜飼育の結合した経済経営システム (economic management system) で行なわれ, このシステムの伝播が温帯を中心にヨーロッパ東部から中・西部に及ぶオーク混合樹林のレス土地域に, 柄穴のない靴型石斧をはじめ, 種々の磨製石質道具 (polished stone tools), 曲線・幾何学的文様の刻線帯文土器, 小集落近くの共同墓地埋葬, 副葬品などに認められる独自の伝統的文化を伴って広がり, 刻線帯文土器

文化地域の東部のインド=イラン牧羊民諸部族 (Indo-Iranian pastoralists tribes) と対照をなしたヨーロッパ東・中・西部の初期農民 (early agriculturalists) は、またイベリア半島、地中海沿岸に先住した非インド=ヨーロッパ諸部族定住地域の外にあり、ヨーロッパ北部へ、インド=ヨーロッパ語族の西方諸語の伝播をも可能とするステージング・エリア (staging area) に位置していた。

小集落群をなす部族 (Stamm, tribe) の移住・定住地域において、彼らは、集落内、集落間の人びとの生活上の感情・意思の伝達と疎通 (communications and understandings), 交渉 (negotiations) の過程に生成・発達した相互に通じ合う共通の部族言語 (gemeinsame Stammessprache, common tribal language) を介したコミュニケーションによって、経験を伝達し合い、生活文化を創造し、最初は「移動農民」的性格を帯びていたが、次第にその農耕と家畜飼育の発達の結果、定着的生活 (sesshafte Lebensweise) の傾向を強め、一段と生存諸条件 (Existenzbedingungen) を整え、生活の安定 (Stabilisierung des Lebens) に努めてきた。彼らは自然環境 (die natürliche Umwelt) との<sup>きょういき</sup>境域で、樹海や川のほとりにいわば島状の定住地を拡大させ、そこに森林伐採・開墾、建物の建築などにかかわる共同労働 (kooperative Arbeiten), 相互の隣人援助 (nachbarschaftliche Hilfe) などに基づいて、経済社会的な共同体のまとまりである定住共同体 (Zusammenschluss zu größerer Gemeinschaft : Siedlungsgemeinschaft) が生成していた。その<sup>ヴァイラー</sup>小村の定住形態 (Weiler-Siedlungsform) において、徐々に、子供の死亡率の低下、成人寿命の伸長、定住地住民数の増大などが、耕地・放牧地の広がりを伴って、生じており、帯文土器文化の伝播地域の西端の南オランダ北西部で、初期に定住者たちは、利用した土地の地力減退のために、利用地を放棄し、継起的な移住がみられたが、この地域でも、テリトリー<sup>くいはうがこ</sup>の確保が強化されるようになり、やがて掘り溝・杭棒<sup>くいはうがこ</sup>囲いをめぐらした集落も現れた。帯文土器文化後期には、定住形態に、囲いに囲まれた数ヘクタール土地に12棟ほどの住居が建てられていた村落定住 (dörfliche Siedlung) と、2, 3棟の住居で、これらのなかには



1棟の大規模な住居の存在する場合があります、それらから構成された小村定住 (weilerartige Siedlung) とが<sup>24)</sup>、認められる。ライン川流域における帯文土器文化後期には、交易のほかに、戦闘も激しく行われ、ウシ飼育の発達による放牧地での柵囲いとも関連して、掘り溝・防御柵・土塁壁などに囲まれる集落が多く現れるようになった<sup>25)</sup>。これらの定住において、部族・定住共同体成員の集まる広場に、集会 (Ratsversammlung) が開かれ、豊穡の呪術的祭祀 (fruchtbarkeitsmagischer Kult), 部族の守護神霊の祭祀が行なわれて、村人の共属感 (仲間意識 Zusammengehörigkeitsgefühl der Dorfbewohner) が強められていた、とみられる。

人びとが生活した日常の営みにおいて、自然物採集・狩猟・漁労の自然の賜物<sup>たまもの</sup>としての直接的な生活の糧の獲得経済形態から栽培・飼育の農業経済形態へ移行することによって、彼らの生活の主要な糧を得るようになったことが、人類史上、いかに特異な射程を印し、その創出がいかに経済社会的に質的な「変革」 ('neolithische Revolution') を及ぼしたかは、新石器時代の栽培作物と家畜が、自然の摂理 (die Providenz der Natur, the Providence of Nature) のもとで、今日に至るまで、人びとの食糧の主要部分をなして、経済社会生活を支えてきている事実、に、明瞭に現れている。西アジア、北アフリカ地域に続いて、ヨーロッパ地域においても、長期にわたる自然物獲得経済形態の文化の上に、発達してきた農業経済社会に関して、とりわけこれまで触れてきた帯文土器文化民の生活にかかわる祭祀場・供犠の聖なる場所で催された神霊との出会い・繋<sup>つな</sup>がりの実態および人びとの自然宗教的な心性は、どのようなであったであろうか。

#### 注

- 1) W. Buttler, *Der donauländische und westliche Kulturkreis der jüngeren Steinzeit*, Berlin u. Leipzig 1938; A. Stieren, E. Sangmeister u. V. Milojevic, *Bandkeramische Studien*, in: *Bericht d. Röm.-German. Komm.*, 33 1943/50, 1951; H. Quitta, *Zur Frage der ältesten Bandkeram.* in: *Mitteleuropa*, in: *Prähist. Zeitschr.*, 38, 1960; *Die Anfänge des Neolithikum vom Orient bis Nordeuropa*, hrsg. von H. Schwabedissen

- sen, Bd. 3, Teil 5a-8b, westliches Mitteleuropa, Köln u. Wien 1972-1978.
- 2) K. J. Narr, Bandkeramik, in: *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*, hrsg. von H. Beck, H. Jankuhn, K. Ranke, R. Weskus, Bd. 2, Berlin 1976, S. 30 f.
  - 3) K. J. Narr, Art. Bandkeramik, in: *Reallexikon d. G. A.*, Bd. 2, 1976, S. 31.
  - 4) N. Robert, *The Holocene. An Environmental History*, 2. ed., Oxford 1998, p. 150; H. Küster, Auswirkungen prähistorischen Siedelns auf die Geschichte Wälder, in: *Archäologische Forschungen in Urgeschichtlichen Siedlungslandschaften. Festschrift für G. Kossack zum 75. Geburtstag*, hrsg. von H. Küster, A. Lang u. P. Schauer, Bonn 1998, S. 26.
  - 5) Herbert Jankuhn, *Vor- und Frühgeschichte von Neolithikum bis zur Völkerwanderungszeit*, mit Beiträgen von Harald Jankuhn, Eberhard May und Ulrich Willerding, Stuttgart 1969, S. 214f., 219f., 221, 223f.
  - 6) P. J. R. Moddermann, Die Hausbau und Siedlungen der Linienbandkeramik in ihrem westlichen Bereich, in: *Die Anfänge des Neolithikums vom Orient bis Nord-europa*, hrsg. von H. Schwabedissen, Fundamenta, Reihe A, Bd. 3, T. 5, Köln 1968, S. 1-7; B. Soudský, Étude de la maison néolithique, in: *Slovenská Archeologia*, Bd. 17, H. 1, 1969, S. 5-96; H. Quitta, Die volle Entfaltung der Gentilgesellschaft auf der Grundlage von Bodenbau und Viehzucht in der Jungsteinzeit (5. bis Ende des 3. Jahrtausends v. u. Z.), in: *Deutsche Geschichte*, Bd. 1, *Von den Anfängen bis zur Ausbildung des Feudalismus Mitte des 11. Jahrhunderts*, hrsg. von J. Herrmann, (Leiter), Köln 1982, S. 47.
  - 7) S. Hiller and V. Nikolov, Tell Karanovo : *Vorläufiger Ausgrabungsbericht*, Institut für Klassische Archäologie der Universität Salzburg 1989 ; S. Hiller, Neue Ausgrabungen in Karanovo, in: D. Srejšović and N. Tasić (eds.), *Vincă and its world: international symposium. The Danubian region from 6000 to 3000 B.C.*, Belgrade : Serbian Academy of sciences 1990, pp. 197-206.
  - 8) H. Kirchner, Wege und Formen Frühgeschichtlicher Gemeinschaftsbildung, in: *Studien Generale* 3, 1950, S. 577ff.; R. Weskus, *Stammesbildung und Verfassung*, S. 17, 273ff.; Alasdair Whittle, *Europe in the Neolithic : the creation of new worlds*, Cambridge 1996, p. 16, pp. 37ff., 144f.
  - 9) Rolf d'Aujourd'hui, Eine Fundstelle der Linearbandkeramik bei Basel, in: *Jahrbuch der Schweizerischen Gesellschaft für Urgeschichte*. Bad. /Vol. 52, 1965. S. 67ff.; F. Hürlimann, Neolithische Handmühlen von einer Ufersiedlung am Greifensee, in: *Jahrb. d. Schw. Gesell. f. Urgesch.*, Bad. /Vol. 52, S. 72ff.
  - 10) A. Whittle, *Europe in the Neolithic. The creation of new worlds*, Cambridge 1996, pp. 37, 63, 68, 69f.
  - 11) H. T. Waterbolk und P. J. R. Moddermann, bandkeramisches Dorf von Geleen,

- in : *Palaeohistoria* 6/7, 1958/59, S. 163ff.; H. Jankuhn, *Vor- und Frühgeschichte von Neolithikum bis zur Völkerwanderungszeit*, Stuttgart 1969, S. 47f.; H. Müller-Karpe, *Handbuch der Vorgeschichte*, München 1966, Bd. 1, S. 230.
- 12) Erhard Schlesier, *Die Grundlagen der Klanbildung : zwei Beiträge zur völkerkundlichen Methodik und Soziologie auf Grund melanesischen Materials*, Göttingen 1956, S. 38, 73ff., 82 ; R. Wenskus, Probleme der germanisch-deutschen Verfassungs- und Sozialgeschichte im Lichte der Ethnosoziologie, in : *Historische Forschungen für Walter Schlesinger*, hrsg. von H. Beumann, S. 28f.; *Menschwerdung. Millionen Jahre Menschheitsentwicklung-natur-und geisteswissenschaftliche Ergebnisse*, verfaßt von Autorenkollektiv unter Leitung von J. Herrmann u. H. Ullrich, Berlin 1991, S. 373f., 448.
- 13) J. Filip, Böhmen und Mähren, in : *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*, begründet von J. Hoops, zweite Aufl. hrsg. von H. Beck, H. Jankuhn, K. Ranke u. R. Wenskus, Bd. 3, Berlin 1978, S. 132 ; H. Beck, Haus, in : *Real. d. Germ. Alt.*, Bd. 13, Berlin 1999, S. 58.
- 14) E. Kaufmann, Sippe, in : *Handwörterbuch zur Deutschen Rechtsgeschichte(HRG)*, hrsg. von A. Eiler, E. Kaufmann unter philologischer Mitarbeit von R. Schmidt-Wiegand, Berlin 1990, Bd. IV, S. 1668ff.
- 15) A. Whittle, *Europe in the Neolithic. The creation of new worlds*, pp. 111f.
- 16) H. Kuhn, Art. Ackrbau, Sprachliches, in : *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*, Berlin 1973 Bd. 1, S. 40f.
- 17) V. G. Childe, *The Danube in Prehistory*, Oxford 1929 ; H. Kühn, *Der Aufstieg der Menschheit*, Frankfurt a. M. 1955 (角田文衛訳『古代文明の開花』1959) ; D. Berciu, *Romania before Burebista*, London 1967 ; J. P. Mallory, D. Q. Adams, *Encyclopedia of Indo-European Culture*, London and Chicago 1997, p. 350.
- 18) S. Tabaczyński, Zur Frage wirtschaftlicher Strukturen in der Jungsteinzeit Mitteleuropas, in : *Zeitschrift für Archäologie*, 6, 1972, S. 161-174 ; D. Kaufmann, *Wirtschaft und Kultur der Stichbandkeramiker im Saalegebiet*, Berlin 1976 ; M. Zapotocká, Die Stichbandkeramik in Böhmen und Mitteleuropa, in : *Die Anfänge des Neolithikums vom Orient bis Nordeuropa*, hrsg. von H. Schwabedissen, Fundamenta, Reihe A, Bd. 3, T. 2, Köln 1970, S. 1-66 ; S. Lichardus, Die Bedeutung der Lengyel-Kultur für das frühe Neolithikum im Mittel- und Süddeutschland, in : *Bayerische Vorgeschichtsblätter*, Jg. 39, 1973, S. 29-54.
- 19) W. Meier-Arendt, *Die Hinkelsteingruppe*, Berlin 1975 ; M. Zapotocká, Die Hinkelsteinkeramik und ihre Beziehungen zum zentralen Gebiet der Stichbandkeramik, in : *Památky archeologické*, Bd. 63, 1972, S. 267-374.
- 20) W. Meier-Arendt, *Zur Frage der Genese der Rössener Kultur*, in : *Germania*, Jg.

- 52, 1974. S. 1-15 ; M. Zapotocká, *Die Stichbandkeramik in Böhmen und Mitteleuropa*, S. 47. レッセン文化住民のザーレ川流域への移住について, D. Kaufmann, *Wirtschaft und Kultur der Stichbandkeramiker im Saalegebiet*, S. 104. レッセン文化について, F. Niquet, *Die Rössener Kultur in Mitteldeutschland*, in : *Jahresschrift für die Vorgeschichte der sächsisch-thüringischen Länder*, Bd. 26, Halle 1937 ; A. Stroh, *Die Rössener Kultur in Südwestdeutschland*, in : *Bericht der Römisch-Germanischen Kommission*, 28. 1938, Berlin 1940.
- 21) M. Dohrn-Ihmig, *Neolithische Siedlungen der Rössener Kultur in der Niederrheinischen Bucht*, München 1983 ; B. Schmidt, Wahltz, in : *Jahresschrift für mitteldeutsche Vorgeschichte*, 54, 1970, S. 83-136.
- 22) R. Kuper/J. Lüning. Untersuchungen zur neolithischen Besiedlung der Aldenhovener Platte, in : *Ausgrabungen in Deutschland*, T. 1, Mainz 1975, S. 85-97.
- 23) F. Niquet, *Die Rössen Kultur in Mitteldeutschland*, in : *Jahresschrift des Halles* XXVI, 1937 ; M. Gimbutas, *The Civilization of the Goddess*, San Francisco 1992, pp. 364-366 ; J. P. Malloy, D. Q. Adams, op. cit., pp. 489f.
- 24) J. P. Farrugia u. a., *Der bandkeramische Siedlungsplatz Langweiler*, Bonn 1973, S. 166-170.
- 25) O. Hockmann, *Wehranlagen der jüngeren Steinzeit*, in : *Ausgrabungen in Deutschland*, T. 3, Mainz 1973, S. 278-296.

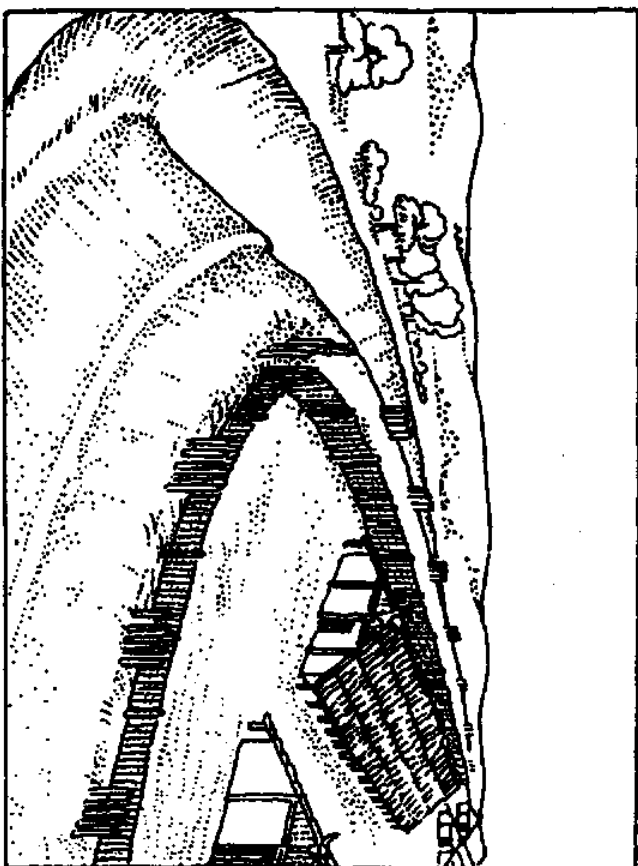
## 第2章 帯文土器文化民の神霊への供犠の実態と彼らの自然宗教的世界にかかわる生活

帯文土器文化民 (Bandkeramikskulturleute) に、彼らの農業生産と結び付いて、「土地 (農地, 採草・放牧地, 農業用地) の豊穡という自然宗教的, 呪術的観念」 (naturreligiöse, magische Vorstellungen von der Fruchtbarkeit der Felder) が存在した。その観念は、一部, オリエントからの「大いなる女性の祭祀」 (Magna-Mater Kult) と同系統の表象世界 (the world of representation ; Vorstellungswelt) に由来する「母神 (Muttergottheit) を意味し, 女性をかたどった具体的な木像, 粘土像」<sup>1)</sup>によって多くは形象化 (embody, formatively verificate) されて, 表わされている。また, 彼らのその観念は, 豊穡呪術の諸内容 (fruchtbarkeitsmagische Inhalte) を形象化する「水祭りと雨乞い」

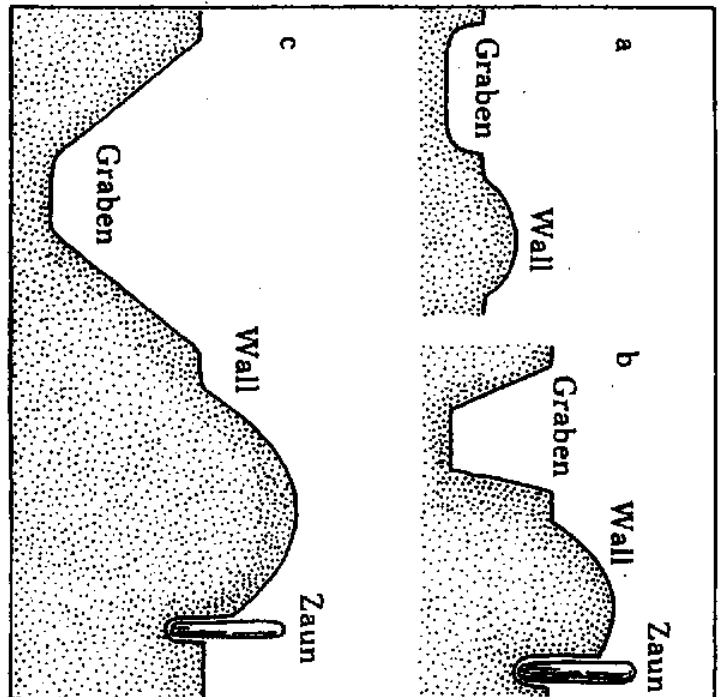
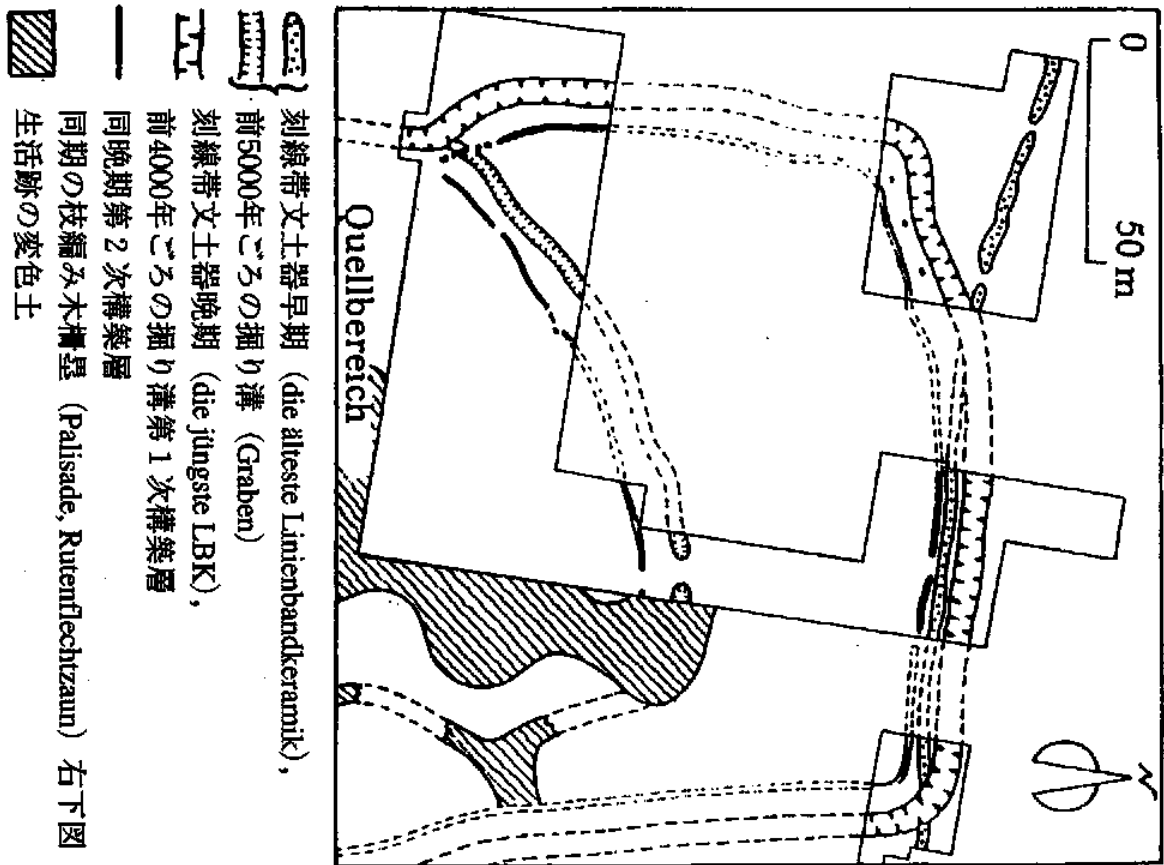
(Wasserkult und Regenzauber) に用いられた容器、雄牛祭 (Stierkult, 雄牛の<sup>いけにえ</sup>生贄・犠牲 Stieropfer) の牛像などの作物栽培・家畜飼育に関連した祭具と祭儀 (Kultsmittel und -formalien) に表われるとりわけ共同体的観念<sup>ゲマインシャフトリツヘ・フォーアシュテルング</sup> (gemeinschaftliche Vorstellung) という特徴を帯びていた。彼ら自身に関して、墓地における墓の造り、備品、飾り付け、副葬品などに依拠するならば、死者の埋葬と祭祀 (Totenbestattung und -kult) にあたり、死者は死後も氏族・定住共同体 (Sippen-und Siedlungsgemeinschaft) の一員として生き続け、生活が営まれると信じられていた、とみることができる。彼らは次第に、死者たちが集まって住む「後の世」 (Jenseits, die jenseitige Welt ; the other world) の観念を持つに至り、他方、遺体の手足を縛った屈葬が行なわれ、死者の帰来の災いや死 [者] に対する恐怖・浄めの観念が生ずるに至った。中部ヨーロッパでは、チューリンゲンの初期帯文土器文化民 (Frühbandkeramikskulturleute), さらにそこからラインラントにかけての後期帯文土器文化民 (Spätbandkeramikskulturleute) のもとで、新たな埋葬慣習として火葬 (Leichenverbrennungen) が現れ<sup>2)</sup>, 恐怖・浄めあるいは身体魂 (Körperseele), 飛翔魂 (Fliegendeseele) などの多様な観念の発達が見られる。以後、特徴的に、身体 (Körper) と靈魂 (Seele) が分けられて考えられ、森や四つ辻や家に靈魂が留まり宿ると信じられた遊離魂・自由魂観念 (Psyche-oder Freiseelenvorstellung) が、人びとの<sup>メンタリテイ</sup>心性 (Mentalität; mental quality, mentality) のなかに生じていくこととなる<sup>3)</sup>。

ハンガリー北東部のアグテレク洞窟 (Aggtelek-Höhle) に、初期新石器時期の帯文土器文化民のブッカー文化 (die Bücker Kultur) が発達し、自然宗教的、呪術的な祭壇施設 (Altaranlage) が認められる<sup>4)</sup>。ニーダーエスターライヒのヘルンバウムガルテン (Hernbaumgarten) における刻線帯文土器文化民 (Linienbandkeramikskulturleute) の定住地には、高さ25cmから30cmほどの粘土皿状の祭壇 “Tonaltar” があり、その祭壇の上や脇に、土器、肉の付いた骨、植物などの置かれた形跡があった<sup>5)</sup>。このような初期新石器時期の犠牲を捧げた<sup>☆きようぎ(くぎ)</sup>供<sup>☆</sup>儀の場所は、神聖な場所 (聖域 Heiligtümer ; sacred places,

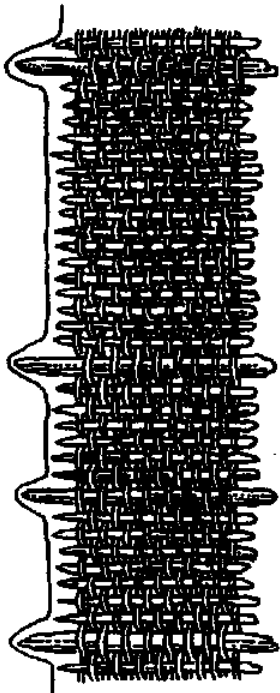
〔図 9〕 アイルスレーベンにおける前5000年ごろの15ha、前4000年ごろの4haの規模を囲む住民と家畜のための防御堡壘で固められた環濠集落 (die befestigte Siedlung von Eisleben, Kr. Wanzleben, Bez. Magdeburg) の堡壘構築北部分 (J. Herrmann [Hrsg.], Archäologie in der DDR. Denkmale u. Funde 1, 2, Leipzig 1989, S. 68, 410f. に基づき作成。)



掘り溝 (環濠) と環濠内に長さ30mまでの柱住居の復元図



- a. Graben : 刻線帯文土器早期の掘り溝  
 b. 同晩期前期の掘り溝 (Graben der jüngsten LBK, ältere Phase)  
 c. 同晩期後期の掘り溝 (Graben der jüngsten LBK, jüngere Phase)



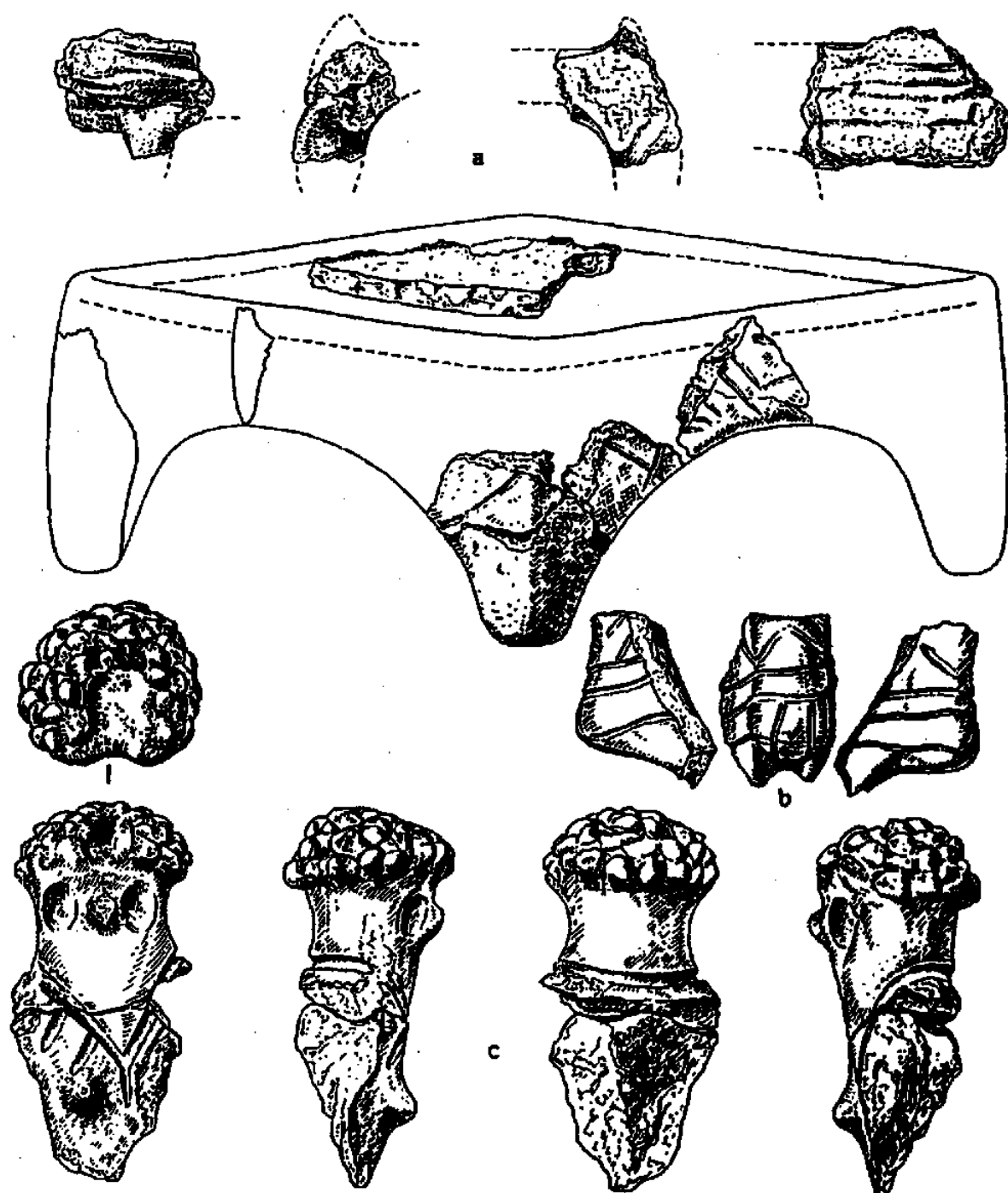
holy grounds) として、上オーストリアのベルクリッツル・フォン・グーゼン (Berglitzl von Gusen ; Berglitzl bei Gusen), ドイツのティーフェネレルン (Tiefenellern, Kr. Bamberg) 近傍のユングフェルン洞窟 (Jungfernhöhle), プライト (Plaidt, Kr. Mayen) などに、祭壇の祭祀施設を伴って、存在した<sup>6)</sup>。ニーダーエスターライヒのエッゲンブルク (Eggenburg) における帯文土器文化民の定住地の祭壇と二つの穴に、穀物と3, 4人の頭蓋部分が供えられていた<sup>7)</sup>。ヘルンバウムガルテン, プライト, エッゲンブルクの共同体の聖域は、帯文土器文化民の<sup>あ</sup>或る住居に関連を持ち、<sup>ホーフ</sup>屋敷地 (Hof) に住むその複合家族によって作られ、他の諸家族からも祭られた崇拜の像 (Idol) が出土している<sup>8)</sup>。神聖な場所で、供犠が繰り返し行なわれ、それらの場所は一般に「共同体の聖域 (Heiligtümer der Gemeinschaften; sanctuaries of communities) になっていた。アグテレク洞窟の祭壇施設は、定住共同体によって利用され<sup>9)</sup>、ヘルンバウムガルテン, プライト, エッゲンブルクなどの祭壇施設も、元来、共同体の聖域に属していた<sup>10)</sup>。刻線帯文土器文化民の定住から500mほど離れたベルクリッツル・フォン・グーゼンの初期新石器時代の供犠の場所、ティーフェネレルンのユングフェルン供犠の場所も、住民共同体 (Bevölkerungsgemeinschaft) の聖域であった<sup>11)</sup>。

犠牲はどのようなものであり、どういう機会に、いかなる理由と目的で、供犠が行なわれたのであろうか。ヨーロッパ中部のエルベ、ヴェーザー両川間のアイルスレーベン (Eilsleben, Kr. Wanzleben), クウェンシュテット (Quenstedt, Kr. Hettstedt) などにおける新石器時代農耕・家畜飼育民の<sup>かきざく</sup>垣柵 (籬垣・矢来) と土塁で防衛された定住地 (befestigte Siedlung [図9]) では、その定住共同体の祭儀用の遺物として、早期刻線帯文土器文化 (die älteste Linienbandkeramikskultur) の装飾の付いた低熱焼き (600-800℃) の小祭壇 ("Altärchen") の破片、人物・動物 (雄牛) をかたどった偶像 (土偶・木石像) 片 (tönerne, hölzerne, steinerne Idolfragmente von anthropomorphen, zoomorphen Plastiken), <sup>アッブリケ</sup>付加造形装飾 (figurale Applikation), 動物をかたどった容器片、円筒形に研磨された砂岩器物、晚期刻線帯文土器文化 (die jüngste



Linienbandkeramikskultur) の装飾の付いた低熱焼きの胴体部分像 (Torso), 輪郭と刻み目を付けた骨製篋<sup>べら</sup>, 多数の皿や鉢の破片などが出土している ([図 10・11])<sup>12)</sup>。アイルスレーベンでは, 上記の雄牛土偶は, 損傷を受け, 破壊された頭部分が残され, 早期刻線帯文土器文化時期の掘り溝から, 雄牛の角の二列に穴を穿<sup>うが</sup>った祭具 ([図12]) が出土し, その掘り溝の北へ 6, 7 m の場所と, 晩期線帯文土器文化時期の掘り溝のすぐ北の場所で, それぞれいくつか並んで出土した墓穴に, 人体の部分・頭蓋埋葬 (Teil-und Schädelbestattung) が行なわれていた<sup>13)</sup>。

すなわち, 前者の早期刻線帯文土器文化時期の墓穴に, 女性と男性の頭蓋部分, ある穴では西部分に人体の左足, そのさらに西側に頭蓋冠 (Schädelkalotte), 左足の南東に早期刻線帯文土器の人形土偶の臀部が埋められ, 穴の上には人体の下脚脛骨 (Tibia) と腓骨 (Fibula) が置かれ, 種々の遺物は破壊され, 下腿骨が土中に垂直や斜めに立て掛けられていた<sup>14)</sup>。後者の晩期刻線帯文土器文化時期の溝ないし穴は, 溝穴に焼け跡<sup>ひたい</sup>が残り, 打撃の傷跡のある雌のヨーロッパ・バイソン (*Bison bonausus*) の頭蓋部, 切落とされた角の円筒形部分, そして「祭儀の粉碾き」 (vituelles Mahlen) に用いられ, 祭祀上の理由から, 破壊されて埋められた粉碾き白石 (Mahlsteine) 8 組の穀粒擦り碎き石盤ないし石皿 (石台 Reibeplatte) と擦り石 (Schleifstein) の破片などの出土した祭祀・供儀の場所 (Kult-und Opferplatz, -stelle) であった。その切落された角の円筒形部分が, 放射性炭素<sup>14</sup>C年代測定法 (radiocarbon-, carbon14 dating) によって, 3953±60 B.C.とされている<sup>15)</sup>。この約20cm下のところに, 17歳から19歳ほどの女性が極端にうずくまった姿勢で, 枷<sup>かせ</sup>を嵌められて, 犠牲として捧げられたとみられている骸骨<sup>16)</sup>, ある穴に 2人以上の, 3本までは確認された左手, 頭蓋杯 (Schädelbecher) として用いられたと推測された頭蓋冠, 他の穴に幾人もの男性の足, 新石器時代の地表面から2.5 mほどの深さの, 以前に用いられた直径約 1.2mの円形の供儀の堅穴 (供儀場所 Opferschacht oder -platz) に, 犠牲に捧げられ, 腕を膝<sup>ひざ</sup>から足首近くの下腿部に結び付けられた姿勢で入れられていた男性の骸骨などが, 出土し

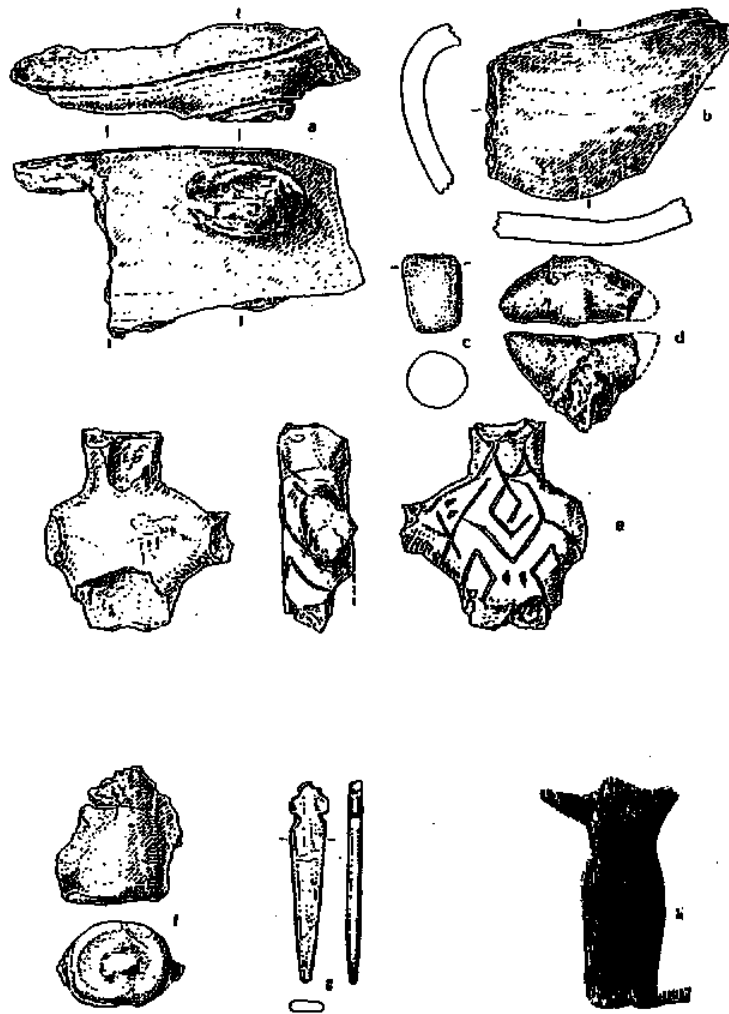


a. 小祭壇 (“Altärchen”)

b. 人物の付加装飾片 (anthropomorphe Applikationen)

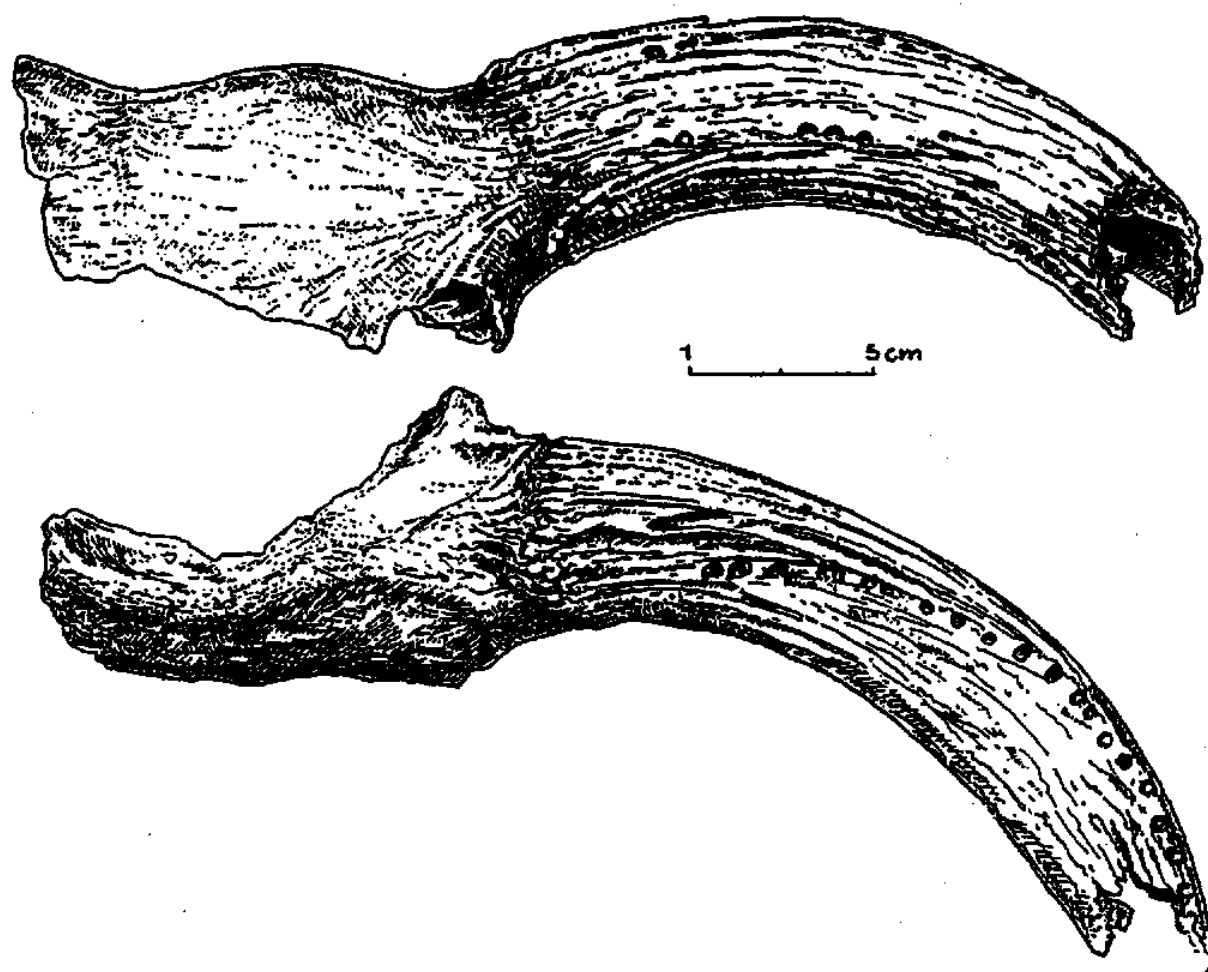
c. 人物 (人形) 女性偶像片 (anthropo. Idolfragmente)

〔図10〕 アイルスレーベン (Eilsleben, Kr. Wanzleben, Bez. Magdeburg) における早期刻線帯文土器時期 (die älteste Linienbandkeramikszeit), 前5000年ごろの祭祀遺物 (D. Kaufmann, Kultische Äußerungen., in: *Religion u. Kult in ur-u. frühgesch. Z.*, Berlin 1989, S. 120, Abb. 2, 122, Abb 4 に基づき作成。)



- a. アイルスレーベン の 早期刻線帯文土器時期の動物をかたどった土偶・容器片 (Fragmente von zoomorphen Plastiken u. Gefäßen)
- b. 同時期の容器片
- c. 円筒形に研磨された砂岩片 (ein konisch zugeschliffenes Sandsteinstück)
- d. 円錐形に研磨された砂岩片
- e. ビルツインクスレーベン の 中期刻線帯文土器時期 (die mittlere LBKZ) の偶像片
- f. アイルスレーベン の 晩期刻線帯文土器時期 (die jüngste LBKZ), 前4000年ごろの胴体部分像 (Idoltorso)
- g. 同期の刻み目付き骨べら (profilierter Knochenspatel)
- h. ツァウシュヴィツの刺突帯文土器時期 (die stichbandkeramische Zeit) の前4000年ごろの人物女性像 ("Venus", Frauenidol)

〔図11〕 アイルスレーベン, ビルツインクスレーベン (Bilzingsleben, Kr. Artern), ツァウシュヴィツ (Zauschwitz, Kr. Borna) における帯文土器時期の祭祀遺物 (D. Kaufmann, a. a. O., S. 112, Abb 1, 120, Abb 2, 121 Abb 3, i J. Herrmann [hrsg], Archäologie in der DDR. Denkmale u. Funde 1, Leipzig 1989 S. 179 に基づき作成。)



〔図12〕 アイルスレーベンにおける早期刻線帯文土器時期の掘り溝（Graben）から出土した家畜雄牛の2列に穴を穿たれた角（Lochreihen-verziertes Horn eines Hausrindes）の祭儀具（D. Kaufmann, a. a. O., S. 123, Abb. 5に基づく。）

た。また、アイルスレーベンの当時の定住地周囲に、穴溝があり、その基底深くには遺物はなかったが、当時の地表面から0.35 mほどの深さの穴と土塁を伴う溝の下、地表面から0.45 mまでのところに、人骨が重ねられていた。加えて、彼ら帯文土器文化民の、祭祀・供儀の場所や穴、あるいは各住居の下ではなく、定住地における埋葬 (Siedlungsbestattung) の行なわれた墓地で、遺体の頭部分が碾き白石の「擦り砕き石盤」の上に置かれていた事例が、認められる<sup>17)</sup>。このような慣行は、時期的に以後長期にわたり、各地の諸文化に見出され、中部ドイツの北部に広まった新石器時期後期のベルンブルク文化 (Bernburger Kultur. Walternienburg の Elbmegalithkultur との結び付きをもった) の穴と防御掘り溝 (Palisadengräben) の底から人骨が出土し、アイルスレーベン近くのアウスヴェレ ("Vossstelle") の刻線帯文土器文化民の鐘形杯文化 (Glockenbecher Kultur) へ至る段階、さらにハンガリー、北ドイツのハールツ (Harz) 山地北部地域、チェコスロヴァキア、中部ボヘミア、低オーストリア (Niederösterreich)、バイエルン、スイス、オーデル (Oder) 川上流域のシレジア (Schlesia) に広まった青銅器時期初期のアウンイエティツ文化 (Aunjetitzer Kultur. プラハ北西、屈葬墓の墓地遺跡ウネティツェ *tschech. Únětice* を標準遺跡とする) へ至る段階に、定住地での埋葬の行なわれた墓地が存在した。晩期刻線帯文土器文化の穴と溝の底の29個所に、人骨破片が1人単独または幾人かの分量で出土し、アウンイエティツ文化の晩期刻線帯文土器期の穴と防御掘り溝の底から、人骨が出土した。これらは防御掘り溝の困難な工事による災<sup>わざ</sup>い (禍) を避け、その安全な進行と完成後も敵を上首尾に防ぐことを祈った神霊への人柱<sup>ひとしら</sup> (人身御供 *Menschenopfer*) であった、とみられる。

アグテレク洞窟に、祭壇のほかに、祭祀に係わる犠牲 [用] の穴 (Opfergrube) があり、供えられた物や血まみれの犠牲が捧げられ、それらの残りの一部が収納穴 (Depositgrube) に入れられていた<sup>18)</sup>。ベルクリッツル・フォン・ゲーゼン、ユングフェルン洞窟などの祭祀の場所 (Kultplatz) において、火が灯<sup>とも</sup>され、さらにどんどん燃<sup>も</sup>やされ、犠牲として、粘土を焼き上げて作った祭具、土器、粉碾き白石、人間・動物の血肉などが供えられ、栽培植物

の犠牲が「供儀の血の<sup>したた</sup>滴らない部分」(unblutiger Teil der Opferhandlung), 人間・動物の犠牲が「供儀の血の滴る部分」(blutiger Teil der Opferhandlung)を表していた。それらの犠牲を大地に埋め、納め、帰す形態をとった穴供儀(Gruben-oder Hohlenopfer)とともに、定住地における埋葬に当っても、「定住地での犠牲」(Siedlungsoffer)が捧げられた場合があった。これらは「母なる大地」("Mutter Erde"),「大地の力」(chthonische Kräfte)および「死・死者への崇敬」(Vereherung des Todes, der Toten)が結び合わさった超自然力ないし神霊(übernatürliche Kräfte oder Gottheiten)、豊穰と死者祭祀の自然宗教的観念世界のもとで、犠牲が捧げられていた<sup>19)</sup>、とみることができる。

神霊に、その年・季節に最初に実り、収穫された穀物の初穂、新穀物、野菜の初物などの<sup>はつものいけにえ</sup>初物犠牲(Primitiaalopfer)が捧げられた。供儀儀式における祭儀の会食・宴(rituele Mahle in der Opferzeremonien)が行なわれた際、お初穂の穀物(das "erste" Getreide)が粉に碾かれ、犠牲として神霊に捧げられ、最初に生まれた牛、羊、山羊などの家畜の犠牲(Opfer des ersten Tiers)も供えられた<sup>20)</sup>。アイルスレーベン<sup>アイルスレーベン</sup>の掘り溝には、晩期刻線帯文土器の深鉢の破片が、壊された粉碾き白石の擦り碎き石盤と関連をもって埋められ、その上に二つの(そのうち一つは確かに故意に壊されていた)岩石製道具(Felsgestein-geräte)が置かれていた。犠牲の「血の滴らない部分」である穀物に伴う祭具のなかに、粉碾き白石や土器が含まれ、それらは祭祀における粉碾きと調理(kultische Mahlen und Kocherei)に重要な役割を<sup>はた</sup>果し<sup>21)</sup>、エルベ、ザーレ両河流域のバルレーベン(Barleben)、ツァウシュヴィツ(Zauschwitz)などで、掘られた穴の底部に、祭祀の際に破壊された穀物粉碾き白石(Getreide-oder Korn-Mahlsteine)の破片が置かれて、出土した<sup>22)</sup>。ヘルンバウムガルテンとエッゲンブルクの祭壇には、なんらかの有機物とコムギの穀粒の残りが判別されている<sup>23)</sup>。

当時のヨーロッパ地域の帯文土器文化民は、コナラやブナの樹間を渡る風の音に耳を傾け、湖岸や川辺に生育した草木に水の<sup>うるお</sup>潤いを見、春の到来を土の

温もりに肌で感じて生活していたと推測される。このような情景のもとで、森や地中の穴に神霊 (Gottesgeist, Geistgotes; divine spirit. 聖霊 der Heilige Geist; Holy Spirit) が鎮座する彼らの集落の聖なる場所に、それら大自然の恵みを祈りつつ、神霊への畏怖 (awe), 畏敬 (awe and respect), さらに崇敬 (reverence) の心をもって、犠牲を捧げて、共存の生活を営んでいた、とみることができるであろう。すなわち、当時の人びとに、自然界における自然現象、人間、動植物の作用や活動に秘められている超自然的、呪術的な諸力 (übernatürliche, magische Kräfte) が信じられ、これが情意的に感得され、すべてが作用力を及ぼし、生きものであるその力を、彼らは鎮め、取り込もうとし (animatism), 自然現象、山川草木、動物、人間などに宿るそれぞれの精霊 (湖水の精・樹木の精・息吹き・生成の力・生命力の根源、のちの *lat.* anima, animus, spiritus; *deut.* Spirit, Geist; *engl.* spirit), 霊魂 (肉体のうちにあって生命や心に働きかける原動力、のちの *deut.* Seele; *engl.* soul. immortality of the soul), 祖霊・家霊 (Ahnen-und Hausgeist) などの、もろもろの出来事や諸現象を生起させ、肉体を活動させ、肉体や現象と精霊・霊魂とを仲立ちするあらゆる霊的存在 (alles spirituelle, geistige Sein; spiritual beings), 大地と水、岩石と樹木、動植物と性など、祭られるもの、頼れるものに、<sup>クラ(フ)トファニー</sup>力の現れ (Kräftephänomen: cra(f)tophany), <sup>ハイエロファニー</sup>神聖さ(聖性)の現れ (Heirophämen; hierophanie, hierophany), 神々 (Götter; gods), これらが信じられていた (spiritism, animism, hierophany, cratophany), とみることができる。嵐が大地を吹き荒れるとき、神霊の声が聞かれ、平穏と豊作を祈願する彼らにとって、未知なもの、異常なものは、人・物・現象に内在し、宿る精霊、霊魂、神霊の超自然的、呪術的な諸力 (übernatürliche, magische Kräfte, die Wirkung des Geistes, der Seele und des Heiligen Geistes. 誘発力 Erregungen. Vgl. mana, supernatural on spiritual power Polynesians, hau, the idea of the soul as a breath Melaneseans, Maoris <sup>エビファニー</sup>24) の顕現として、たとえばある一つの石が超自然的な力をもつのは、神霊がその石と結び付き、常時の自然・環境以上のものとなっている状態として、意識されていたからであろう。

定住共同体の集落をなす人びとによって、超自然的な力ないし神靈に、偶像、土偶、容器、動植物、人間の身命（身体と生命 <sup>しんめい</sup> man's life）、道具、飲食物などを犠牲（のちの lat. sacrificium 神聖なものとして捧げられたもの、lat. *victima* いけにえとされた獣畜 *beast for sacrifice, sacrificial victim*; *sacer* 神聖な、*facere* [*facio*] 作る・創造する、行なう・捧げる・祭儀を挙げる、ある状態を生じさせる、*sacrificare* [*sacrifico*] 犠牲を捧げる）として捧げる聖なる祭儀が、催されていた。このいわば公共の供犠（lat. *sacrificatio publica, sacrificium publicum*）のなかに、集落の人びとによって生きた人間や動物が殺され、その生命と血肉が神靈に捧げられ、時に神靈と祭儀参加者が血肉を飲食し合う「共食」のあったことが、祭祀場の形跡や遺物から、推測される。ベルクリッツル・フォン・グーゼン、ユングフェルン洞窟、アイルスレーベンなどの遺跡は、新石器時期初期の定住地住民にとって、人間が捧げられた人身供犠（人身御供 <sup>じんしんくぎ</sup> Menschenopfer, human sacrifice）が、重要な意味をもち、大きな役割を果たしていたことを、示している<sup>25)</sup>。それらの人身供犠はかならずしも全身（*in toto*）ではなく、部分犠牲（*pars-pro-toto-Opfer*）の奉献（*oblation, offering*）と他の部分埋葬（*Stückelbestattungen*）の行なわれた場合があり、部分犠牲の頭蓋、手足、杯として用いられた頭蓋冠が、発掘されている。

帯文土器文化民のもとで、集落の誰が祭儀の犠牲とされたのであろうか。ユングフェルン洞窟において、発掘遺物によるならば、犠牲とされた38人のうち、男性はわずか2人であり、全体を年齢別でみると、1歳未満から7歳までが23人、11歳から14歳までが5人、18歳から20歳までが10人と推測されており、グーゼンにおける供犠の場所でも、女性および子供の遺骸が圧倒的に多く、このことはアイルスレーベンにおいても、当てはまる<sup>26)</sup>。従って、当時、優先的に女性と子供が犠牲とされる事態の多かったことを、指摘することができる。

ウラル（Ural）山脈の西方、ヴォルガ（Volga）川とその支流カマ（Kama）川流域からヨーロッパ中部地域においてこれまでみてきた帯文土器文化民のもとでも、また広く新石器時期の農業を営んだ人びとのもとでも、彼らの自然宗教的観念に、死者祭祀（Totenkult）・埋葬儀式（Bestattungsritus）と並んで、



経済の生産的形態への移行に係わって、自然祭祀 (Naturkult) と結び付いた豊穡祭祀 (Fruchtbarkeitskult) が生じ、盛大な祭祀が催されるようになった。それは「母なる大地」(“Mutter Erde”), 太陽, 雨, 水その他自然の豊穡性に影響を及ぼすと信じられたものを神霊として崇敬し, 集落・一族をあげてさまざまな儀式・供犠・祭祀 (Ritus-, Opfer-und Kulthandlungen) を行ない, アクティヴな効果を祈願するようになった。農業・農耕自然宗教 (Agrar-oder Ackerbaunaturreligion) に基づく農業祭祀 (Agrarkult) の挙行である<sup>27)</sup>。ここにみられる農業自然宗教は, 自然諸力・現象の体現・擬人化と崇敬 (embodiment; Personifizierung von Naturkräften und-erscheinungen, und deren Vereherung) から祖先祭祀 (Ahnenkult) までに及ぶ多様な自然宗教観念を含み, それらのなかで, 自然諸神 (Naturgottheiten) に農業の恵みと生活についての支えを期待し, 天災に対して自然諸神を恐れ, 怒りを和らげ, <sup>やわ</sup>禍を避け, <sup>わざわい</sup>豊穡を祈った神霊信仰 (Glaube an Götter und Geister) が, 当時の観念基盤をなすに至っていた, ということができる。彼らは自然諸神に作物, なかでも穀物の豊穡と健康な家畜の飼育を祈っていた<sup>28)</sup>。そして, 帯文土器文化の彼ら農耕・家畜飼育民のもとで, 前4000年ごろに, 一般的に, 低位ながらも, 経済生活的剰余と定住共同体の社会的発達によって, アイルスレーベンの定住において先駆的に定住地の周囲に掘り溝, 木の柵, 土塁壁, 防御囲いのめぐらされた集落が出現しているが, その集落をあげて住民のいわば非生産労働へのかなりの従事も可能となっていた。

新石器時期早期から, なんらかの<sup>かたど</sup>象りをされた木・粘土製偶像, 人物・動物偶像, 祭儀用容器などが作られていたが, それらのなかに, 女神像と動物の雄像が対照的 (contrastive) に存在していた場合がある。すでに, チャタル・ヒュユクにおいて, 大自然の, また農業上豊穡の女神 (Muttergottheit) と力の象徴としての成熟した<sup>たいく</sup>体軀の雄牛 (Stier), 雄羊 (Widder) が崇敬されていたが, ヨーロッパ地域においては, 神霊に血の滴る犠牲が捧げられ, 人のほかに他の動物も奉献の対象とされ, 両者が一緒に供えられた場合があった。アイルスレーベンでは, 上記のように, 刻線帯文土器文化早期の掘り溝に, 二列

に並ぶ穴飾りを穿たれた雄牛の角柱の祭具が出土し、同時期の遺物に人物・動物（雄牛）の土偶片、その掘り溝近くと、刻線帯文土器文化晩期の溝近くのそれぞれいくつかの墓穴に、男女の身体の部分埋葬が行なわれ、同晩期の溝の以前からの供犠・祭祀の場所に、粉碾き白石の擦り碎き石盤・擦り石の破片に囲まれる状態で、その下わずか20cmの深さの位置に、定住地犠牲（Siedlungsoffer）として、17歳から19歳ほどの女性の完全に揃った体の犠牲（“Menschenopfer in toto”）が奉獻されており、このすぐ上に粉碾き白石と一緒に、切落された角の円筒形呑み口および額を殴打された雌のウーア（野牛Ur, アォアアオックス Auerochse. 飼育されたものか）の頭蓋が置かれていた。若い女性の身体と雌ウーアの頭蓋と生命は、集落あげての穀物栽培と家畜飼育の豊穰性（Fruchtbarkeit）の象徴化（Symbolisierung; symbolizing）と考えられる。

当時、通常の埋葬の遺跡に、安置された遺体の頭、手、足などの欠如していた埋葬の跡がある<sup>29)</sup>。ドイツ中部のメルケヴィッツ（Merkewitz）の墓地では、頭部のない8歳から10歳ほどの少女が埋葬されており<sup>30)</sup>、アイルスレーベンでは、刻線帯文土器文化の早期以来、遺体が一部を細かく切断された分断ないし部分埋葬（Stückel-oder Teilbestattung）と人体が切り刻まれた頭蓋・手・足の断片犠牲（pars-pro-toto-Opfer; das zerstückelte Opfer, Stückelopfer）の奉獻が行なわれ<sup>31)</sup>、上オーストリアのベルクリッツ・フォン・グーゼンの供犠の場所に、人体部分のおびただしい骨が残っており、頭、歯、<sup>したあご</sup>下顎などの身体部分の崇拝（Verehrung menschlicher Körperteile）が行なわれた、とみられている<sup>32)</sup>。祭祀の犠牲の頭蓋に、下顎の欠如しているものや下顎の特別に扱われたものもあり<sup>33)</sup>、刻線帯文土器文化晩期以降のアイルスレーベン、タオバッハ（Taubach, Kr. Weimar）などで、親しい人の亡くなった場合、追悼のために、身体の一部の下顎などが穴を掘って別に埋められたり、持ち運ばれたりすることの行なわれた<sup>34)</sup>ことが、認められる。

いかなる帯文土器文化民の共同体も、祭祀挙行に当たり、むやみに、ひたすら人身供犠のみを行なったのではなく、彼らの共同体的祭祀の「血の滴る人間および動物の犠牲」とともに、彫刻像・粘土像、人形・動物形土偶などが、

代替（身代り・形代）犠牲（Substitutopfer）として、捧げられ<sup>35)</sup>、彼ら自身の滅亡をみずから招来する危機に落ち込んでいったのではなかったということができるであろう。その新石器時期早期の農耕・家畜飼育民のもとで、犠牲に予定される人間が人形<sup>にんぎよう</sup>、絵像<sup>えぞう</sup>、また女性の犠牲が粘土製女性像、さらには焼きパンなどによって代替され、土偶その他が代替犠牲として役立てられ、人間と動物の身体と生命の犠牲が代替物に反映して、それらは生きているものと同様に見做されて、捧げられていた、とみることができるであろう。

犠牲に捧げられる人は、新石器時期、さらには金属器時期に、慣例的となった祭祀の場合、捧げられる比較的長いあいだ前から、神霊によって白羽の矢を立てられ、その人は仲間<sup>なかま</sup>を代表する、住民のなかでより高貴な者として、神聖にふさわしい存在となっていた<sup>36)</sup>。定住地域の集落住民が関与した祭祀において、祭儀を取り仕切る祭司（Priester）、長老（Alte, Älteste）ないし村長（Dorfälteste）が現れた<sup>37)</sup>。人身供犠の背景に、人身を捧げた人びとの全体的なグループができており、自然宗教的誘因（die naturreligiöse Gründe）のもとに、定住の発達に伴う中刻集落を囲むさらにそれ以上の大規模な祭祀共同体に係わることになった。このように、帯文土器文化民社会のいくつかは、共同体成員全体によって、供犠が祭儀と結び付き、祝祭と饗宴の形態（Kulthandlungen und -zeremonien, feierliche und festliche Formen）で行なわれ、エルベ、ザーレ両川流域の刻線帯文土器文化の時期の遺跡およびクェンシュテット（Quenstedt）における刺突帯文土器の時期の後期のいわゆる「円形聖地」の中央祭祀場（zentrale Kultstatte in “Ringheiligtum”）では、近隣のいくつかの定住共同体（Siedlungsgemeinschaften）ないしより大きな団体とその声望のある人物によって、供犠の儀式が行なわれ、祭祀跡を残している<sup>38)</sup>。この祭祀には、共同体ないしその集合体の成人した成員の誰もが締め出されることなく、大勢が参集した、とみられる。エルベ、ザーレ両川流域の刻線・刺突帯文土器時期に、長期に利用された祭祀・供犠場所は、遺跡として確認できていないが、アイルスレーベン、バルレーベン（Barleben）、ツァウシュヴィッツ（Zauschwitz）などにおいて、かつて執り行なわれた祭祀・供犠の場所

に再度祭祀・供犠の行なわれた形跡があり、これらの場合、帯文土器文化の農耕・家畜飼育民は、豊穡の祭祀を執り行なう行為主体であったのみならず、彼ら自身伝統的な祭祀の客体 (object) でもあり、人身供犠は農民共同体 (bäuerliche Gemeinschaft) が共同体成員を挙げて継続して、超自然諸力の効果を祈願して行なわれたものと推測される。彼ら初期新石器時期農民的住民 (frühneolithische bäuerliche Bevölkerung) は、いまだ擬人化された神々 (persönifizierte Gottheiten) を崇拝しておらず、共同体をなす人びとの心に、「豊穡への崇敬」 (Verehrung der Fruchtbarkeit) は、太陽、雨などの自然崇拝とともに、「母なる大地」 ("Mutter Erde") と女性 (weibliche Wesen) が誕生・成長・豊穡・死滅と緊密に結び付けられて祈念されており<sup>39)</sup>、しばしば女性の犠牲およびその他の犠牲、代替犠牲の残余が地中に埋められたことが、それを示している<sup>40)</sup>。農業を営む彼らの生活のもとで、動物犠牲に偶蹄類の家畜が多く、3歳未満の未經産の、これから子を産む雌牛が犠牲 (sacrificial heifer) とされ、また花盛りの穀物畑については、妊婦に<sup>なぞら</sup>準え、その畑に押し入って妨害してはならないとされていた<sup>41)</sup>。

血の滴る犠牲が、祭祀の際に、粘土像 (figurale Tonplastiken, 人物・動物の土偶 Tonfiguren, 偶像 Idole), 植物 (草花・穀物), 装身具, 道具などのいわゆる血の滴らない犠牲と関連し合って捧げられていた。そこでは、犠牲と供犠祭儀に仲立ち (Mittler; medium) の役を果たすさまざまな祭具は、それ自体、犠牲でもあり、世俗で用いられた粉碾き白石や容器などの日常大切なもの、あるいはありきたりのものであっても、神聖さを帯びた聖なる祭具と見做された。刻線帯文土器文化期の40体を越える女性の人身犠牲は、牛・馬の身体部分とともに捧げられ、また祭壇には、たとえば女性の切断された二つの<sup>てのひら</sup>掌から肘までの前膊および分けられた頭蓋の半分が供えられるという状態<sup>42)</sup>がみられた。動物犠牲は人身犠牲を強め合い、あるいはこれにとって代わり、刺突文土器文化期には一層多く現れるようになる。帯文土器文化民のもとで、人または動物の体、その一部分、頭蓋、臀部、手、足などが犠牲とされ、他の切断された部分が別に埋葬された。分断と並んで、粘土像、道具、祭具などは、故意に壊さ

れている場合が多い<sup>43)</sup>。中部ドイツのマールブルク近くのシュロェク (Schröck bei Marburg), ウェッテラウのロッケンベルク (Rockenburg, Wetteraukreis) などでは、粘土像は、破壊を予定して、分断される頭と体の部分が嵌め合わせの柄 (Paßstift; pin, tenon) <sup>はぞ</sup>によって繋げられていた<sup>44)</sup>。粘土像は、人身の分断・部分犠牲に対応して、意図的に壊されて捧げられ、部分の破片が別々の場所に埋められることがあった。すでにヴィンチャ (Vincă) 遺跡の1000個を超える粘土像のうち、ごくわずかが完全に破片を繋ぎ合わせる事ができたにとどまり、故意に壊された粘土像や祭具の破片は、さまざまな場所に安置された場合が多く、なかにはそれらが耕地の呪術的豊穰化 (magische Befruchtung) のために埋められた場合が認められている<sup>45)</sup>。供犠祭儀と結び付いて、それらの破壊が行なわれていた。

神霊は、供犠祭儀において捧げられた奉獻物 (供物 Opfergaben) を断ることもあると信じられ、その場合に、共同成員はそれに代わるものを捧げる義務を負い、「人物・動物粘土像や祭具の破壊」そのものが供えられたほかに、人身まるごとの犠牲 (Menschenopfer, human sacrifice in toto) が供えられたりもした。それらの奉獻物の破壊・血の滴りについては、洞窟、溝や穴などでの神霊の御加護下の神聖な領域における奉獻物の破壊・血の滴りとそれらの地中への収蔵が行なわれ、破壊と収蔵によって、奉獻物が世俗の目的に提供されず、取り戻すことのできないものであることが、意味されていた<sup>46)</sup>。彼ら新石器時期初期帯文土器文化の農耕・家畜飼育民のもとで、祭祀に向けて犠牲に見込まれた人と家畜の聖なる高揚 (Erhöhung) があり、「豊穰の神々」(“Gottheiten der Fruchtbarkeit”) の形 <sup>かたち</sup>あるもの、具象ないし具象像 (Anschaulichkeit oder Anschauungsbild) に係わるものとして、犠牲が捧げられ、それらの故意の、わたくしたちからみて悲惨極まりない、非合理的 (irrational) な殺害と破壊は、敬虔な自然宗教的観念 (naturreligiöse Vorstellung) の表象世界に包まれた神霊と彼らとの交わり (heilige Kommunizierung, Verbindung mit dem Gottesgeist; holy communication with divine spirit, holding communion 霊的交渉・交流) の祭祀・供犠儀式 (Kult-und Opferzeremonien) であった<sup>47)</sup>、とみ

ることができる。上記のアイルスレーベンの晩期刻線帯文土器時期の溝下に1人の若い女性、その上に雌のウーアの頭蓋部分とともに、壊された穀粒粉碾き白石の破片が埋められていた例に表れたように、大地、「豊穡の神々」、人身・動物・粘土像などの犠牲のあいだの境界や本質的な区別はもはやそこではほとんどなかった。祭具は全体欠けずに揃って、あるいは壊されて分散して、洞窟、供犠の場所、供犠穴ないし収納保管穴に、安置されたり、埋められたりした。祭具のなかの上記の祭祀と結びついた粉碾き白石は、調理の役割を果たすと同時に、祭儀的穀粒粉碾き (das rituelle Mahlen des Getreides) によって、「豊穡の神々」との合一が図られ、高揚された「豊穡の神々」の殺害 (die Tötung des "Gottes der Fruchtbarkeit") がシンボライズされていたと解される<sup>48)</sup>。

粘土製人物像のなかに、男性像も見出される場合があるが、女性像のような豊穡性 (Fruchtbarkeitsgottheit) をかならずしも表さず、ユングフェルン洞窟をはじめ、各地の遺跡に、数量的に粘土製男性像がわずかであった<sup>49)</sup>ように、現実には男性人身犠牲そのものの割合の少なかった面も、反映している。むしろ、男性の<sup>とうがいかん</sup>頭蓋冠 (Schädelkalotten) が注目される。刻線帯文土器分布地域のドラブルク近くのタボラック (Taborac bei Draßburg/Burgenland) の墓内に、18個の男性頭蓋冠が土器、<sup>しつくい</sup>漆喰、粉碾き白石と一緒に埋められており、アイルスレーベンの刻線帯文土器文化民の定住の墓穴からは、少なくとも3個の男性の明らかに頭蓋杯 (Schädelbecher) として用いられたものが出土した。タボラックでも、人為的に杯に仕上げられた頭蓋冠のなかに、30歳に近い男性の頭蓋杯がある<sup>50)</sup>。成人頭蓋杯は金属器時期の他の祭祀・供犠の場所からも出土し<sup>51)</sup>、祭祀・供犠儀式に祭具として用いられていた<sup>52)</sup>。表面に装飾のように人面を付けた容器、動物を<sup>かたど</sup>象った容器 (holy vessels) は<sup>あまうらな</sup>雨占い・<sup>こ</sup>雨乞いの祭儀に用いられ、頭蓋杯とともに、それらの容器に、飲食物が入れられ、「豊穡の神々」と一緒に、参集者ないしその代表者は飲食し合い、一体化が図られた、と推測される。

ティーフェネレルン、グーゼンなどの祭祀施設、供犠の場所、アイルスレーベンの晩期刻線帯文土器文化期の掘り溝などで、点火・燃焼の跡があり、祭

祀・供犠の仲立ちに、照明と浄化の火も用いられていた。人身・動植物・粘土像・祭具などの供犠と点火が、なによりも共同体全体の周知の公共的奉獻 (offensichtliche allgemeine Gaben der gesamten Gemeinschaft) であった、とみることができる。

アイルスレーベンにおける早期刻線帯文土器民の定住地に現れた多数の粘土製の人物・動物を象った祭祀像 (anthropo-und zoomorphe Kultfiguren) のなかに、家 (Haus) の神聖な領域 (sakraler Bereich) に所属し、稀れではあったが、屋敷地より幾分高められて設けられた小祭壇の場所に、家族によって作られ、安置された祭祀像が崇拜されていた。このように、定住・祭祀共同体 (Siedlungs-oder Kultgemeinschaft) によって祭祀と供犠が行なわれたほかに、家族レベルの比較的狭い範囲の結びとのもとで、粘土製祭祀像が祭られ、あるいは代替犠牲として神霊ないし家霊に奉獻されていた。家族 (Familie) による祭祀ないし供犠は、一般的に、新石器時期後期の前4000年以降、ドーナウ川流域第1期文化から地域的な発達を遂げて、ドーナウ川中流域からパンノニア平原、ハンガリー地域の複合集落の中央祭祀施設をもったレンジェル文化民 (Lengyelkulturleute), 後期刺突帯文土器文化民 (späte Stichbandkeramik-kulturleute) の時期的推移の過程に、家族の祭祀として、除々に分離析出してくる<sup>53)</sup>。

ヨーロッパ地域の新石器時期に、自覚された1年の移り変わりに対応して、生活の<sup>こよみ</sup>暦 (calendar) に春夏秋冬の慣習が盛られ、春祭り (Frühlingsfest), 夏至・冬至祭 (Sonnenwendfeier) などの始まりが民衆の生活暦として日程にのぼってきたことが、認められる。農業労働に関する天候の予知、耕作の開始期、播種の時期、放牧期、収穫期などが、鶏の生んだ卵の大きさや蛙の鳴き声で判断され、播種に先立ち、種子と鶏卵を置き、村の子供達が拾い集め、豊穰を祈願し、種子を<sup>かんばつ</sup>旱魃から守るため、村の女性達が種子にも、参集者にも、水を注ぎ、旱魃の際、女性達が川にはいり、白樺の枝束を水に<sup>ひ</sup>浸け、「水の母」 ("Mutter des Wassers") に雨乞いをし、あるいは季節が移ろって、穀物刈入れの最初の穀物束は、村で信望の厚い老女が刈上げ、新穀物の<sup>かゆ</sup>粥・パンが、祭

祀の聖所で、彼らの織った布の上に、他の飲食物とともに、食事に出される慣習 (Herbstbräuche 収穫の諸慣習, havest home 刈上げの祝宴) の始まりが、推測されている<sup>54)</sup>。定住の進んだ<sup>ヴァイラー</sup>小村共同体 (Weilersiedlungsgemeinschaft) と氏族秩序 (Sippenordnung) が影響を与え<sup>55)</sup>、祭司 (Priester) ないし長老 (Alte) が、聖所での祭祀に、自然諸力・神霊による豊かな実りと健康な家畜の成育への加護を述べたであろう。飲食物のはいった容器が火の上に置かれ、飲食物の一部が “Mutter Erde” と死者の死出の旅の食糧 (Wegzehrung) などのために、畑に埋められ、あるいは穀粒・パンの切れ端<sup>はし</sup>、鴨の肉などのはいった籠<sup>かご</sup>と飲料入りの容器が家近くの木につるされるなどの日常の農業・村落・祖先祭祀 (Agrar-, Dorf- und Ahnenkult) が、遺物に形跡を残している。

ヨーロッパ地域では、紀元前5000年ないし前4000年ごろ、初期農耕・家畜飼育住民の自然宗教的、精神的観念世界と豊穡祭祀 (naturreligiöse, geistige Vorstellungswelt und Fruchtbarkeitskult der frühneolithischen Bodenbauerlichen, Viehhalterlichen Bevölkerung) のもとで、神霊が宿り鎮座すると信じられた森林、大地、丘の上、山頂に向けて、共同体的に祭祀を執り行なう場所が定められ、神霊を祭り、豊穡・家畜の健康をはじめ、諸々の目的の達成成就と平穩を得ようとする社会的、呪術・精神的生活 (das soziale, magisch-geistige Leben) が営まれていた<sup>56)</sup>。当時の自然・社会環境条件 (die natürliche und soziale Umweltbedingungen) のもと、彼らは万事を「あの始めのときに」 (in illo tempore) といういわば祖型に合わせて、黎明<sup>あけぼの</sup>に当り、為されていた生成の力との交わりを、繰り返し行い、行為の規範を踏み、受け継ぎ、確実性を強めつつ、成果を得ようと祈願した。神霊のもたらす陽光と慈雨は、大地を豊潤にし、生命を芽吹かせ、地母神の宿る大地は、穀物の実りと家畜の成育をもたらす<sup>57)</sup>。日常生活の動植物の誕生と死滅、発芽生育と枯死、とりわけ豊穡は、妊産婦 (Gebärerin; pregnant women) と関連づけられ、豊穡の崇敬のシンボル (Verehrungssymbol der Fruchtbarkeit) は母親のシンボル (Muttersymbol; nursing motherssymbol) と同一視され、生命が息吹く岩石の裂け目や大地の溝穴に由来し、地母神の胎内に挿入されていたと信じられた幼



児は、母親の出産後、もう一度、大地に置かれ（「土の揺籃」）、力を得て、抱きかかえられ、母親の乳房にすがり、胸に憩いの場を見出して育つ。そこでは、大地と動植物・人間が呪術共感的に結び合っており、大地は豊かな生命を内包し、人びとは神霊との抱擁によって多産が得られると信じられ、大地・農耕・女性、食物共食・共生が、公共の祭祀とかかわっていた<sup>58)</sup>、とみることができるであろう。

ふだん家畜と穀物を食糧にし、それらの生命を頂<sup>いた</sup>（戴）き、みずから汚<sup>けが</sup>（穢）れた状態に身を置くことに対して、このいわば「肉食獣との同一」を避け、つねひごろ生命を解放させる贖罪の儀式を行ない、あるいは差し迫った旱魃<sup>かんばつ</sup>の雨乞い・疾病<sup>びら</sup>払い、他集団との戦勝の祈願などの事態に、神霊を宥<sup>なだ</sup>め、讃える祭儀が催されていた。上記のように、彼岸と此岸<sup>しがん</sup>の境の設定された聖域において祭儀が執り行なわれ、聖界と俗界を仲立ちする血の滴りと破壊の表象を通じて、好ましい聖性の祝福の受容、好ましくない悪霊の追い払い（放逐<sup>ほうちく</sup>）あるいは汚れの払いなどの成就される公共の儀式において、犠牲は、聖俗両界の媒体をなしていた。神霊の宿る聖界と人間の俗界は、供犠の祭儀が挙行されることによって、両者の境界領域が一段と広がっていく空間となり、祭祀の場所が神秘的霊的交流の生起する所となる。犠牲は聖化されるに対応して、俗界から聖界との境域へとその帰属を移しつつ、聖性の高まりの感じられた境で、殺害、破碎された。犠牲にとって、その時点で、俗界の交わりの混交状態が生じたのではないだろうか。犠牲は超自然諸力の制裁を避けるための冒してはならない神聖に近づいた特別なもの、あるいは逆に平穩を脅かす恐れるべき触れてはならない不浄なもの、危険なものとなり、タブー視され、禁忌の祭祀が挙行されていた、とみることができる。

以上のように、新石器時期初期の帯文土器文化民のもとで、奉獻された犠牲の生命は、祭儀ののち、聖界に属し、聖界のものと信じられ、俗界に残った死体の一部は、収納穴のほかに、実際に土穴のなかに埋め込まれ、あるいは焼却、散布された。混交した聖俗2つの世界はふたたび分離するが、俗界はひとまず安定を回復し、生命力・繁殖力・浄化力を獲得すると考えられていたのである

うと推測される。このような諸力が犠牲によって要請・祈願された背後に、当時の人びとの自然宗教的観念世界と、旱魃、疾病、戦乱に対する集落共同体の危機への現実的対応があり、集落を挙げて、犠牲を介して、聖界の神霊との交流が図られ、時には供犠された動植物や飲み物を飲食し合う「神人共食」によって、公共的に、神霊と犠牲と人びととの一体化、生命力をはじめとする諸力の確保、厄落<sup>やくおち</sup>としなどの希求される事態が存在した。のちには、居住地・農地の区画設定、時候<sup>シーズン</sup> (season) の推移、定住場所・生活状態の変更の確認、共同体 (体) 成員の通過儀礼、犯した罪の赦免、有力者の王位への登極など、神霊に犠牲や財物の贈り物を捧げて、恵みと祝賀を期待するようになる。当時の人びとにとっては、いわば犠牲を含む祭祀そのものを、神霊に奉獻していた。彼らは大自然のなかで、目にし、耳にした事態から生じた観念世界の神霊の加護のもとに、聖域地において催す祭祀を拠り所として、暮らしを立てていた、とみることができる。

#### 注

- 1) O. Höckmann, Andeutungen zu Religion und Kultus in der bandkeramischen Kultur, in: *Aktuelle Fragen der Bandkeramik, Alba Regia*, Bd. 12, Székesféhervár 1972, S. 187-210; D. Kaufmann, Linienbandkeramische Kultgegenstände aus dem Elbe-Saale-Gebiet, in: *Jahresschrift für mitteldeutsche Vorgeschichte*, Bd. 60, 1976, S. 61-97.
- 2) E. Hoffmann, Zur Problematik der bandkeramischen Brandbestattungen in Mitteleuropa, in: *Jahresschrift für mitteldeutsche Vorgeschichte*, Bd. 57, 1972, S. 71-104.
- 3) 三浦弘万「『生きている屍』の観念と埋葬習慣」「霊魂観念の諸様態」(『ゲルマン経済・社会・文化の史的研究』319~333, 335~358ページ) 参照。
- 4) J. Makkay, Über neolithische Opferformen, in: *Valcamonica Symposium '72, Capo di Ponte*, 1975, S. 172 ; J. Lichardus, *Studien zur Bükker Kultur*, Bonn 1974, S. 53 f.
- 5) F. Felgenhauer, Ein "Tonaltar" der Notenkopfkeramik aus Herrnbaumgarten, p. B. Mistelbach, NÖ, in: *Archaeologia Austriaca* 38, S. 1-20.
- 6) M. Pertlwieser, Die "Berglitzl" von Gusen. Ein neolithisch-frühbronzezeitlicher Opferplatz an der oberösterreichischen Donau, in: *A. Móra Ferenc Múzeum Évkönyve 1974-75*, 1975, S. 299-310 ; O. Kunkel, *Die Jungfernhöhle bei Tiefenellern*,

- München 1955, Ders., *Die jungfernhöhle, eine neolithische Kultstätte in Oberfranke, Neue Ausgrabungen in Deutschland*, Berlin 1958, S. 54-67; H. Müller-Karpe, *Handbuch der Vorgeschichte*, Bd. II, *Jungsteinzeit*, München 1968, S. 1968, S. 346 ; W. Meier-Arendt, Die späteste Linienbandkeramik von Plaidt, Kreis Mayen, und die "Importgruppe 1" von Köln-Lindenthal, in: *Kölner Jahrbuch für Vor und Frühgeschichte*, 10, 1969, S. 16 ; O. Höckmann, Andeutungen zur Religion und Kultus in der bandkeramischen Kultur, in: *Aktuelle Fragen der Bandkeramik*, Székesfehérvár 1972, S. 196.
- 7) O. Höckmann, a. a. O., S. 195.
  - 8) O. Höckmann, a. a. O., S. 195 f.
  - 9) S. Makkay, a. a. O., S. 172.
  - 10) O. Höckmann, a. a. O., S. 195 f.
  - 11) M. Pertlwieser, Die "Berglitzl" von Gusen. Ein neolithisch-frühbronzezeitlicher Opferplatz an der oberösterreichischen Donau, in: *A Móra Ferenc Múzeum Évkönyve 1974-75*, 1975, S. 309.
  - 12) D. Kaufmann, Neue Funde der ältesten Linienbandkeramik von Eisleben, Kreis Wanzleben, in: *Beiträge zur Ur- und Frühgeschichte I, Festschrift für W. Coblentz*, Berlin 1981, S. 129-143 ; Ders., Kultische Äußerungen im Frühneolithikum des Elbe-Saale-Gebietes, in: *Religion und Kult in ur- und frühgeschichtlicher Zeit*, hrsg. von F. Schlette und D. Kaufmann, Berlin 1989, S. 119 ff.
  - 13) D. Kaufmann, Kultische Äußerung., S.123.
  - 14) D. Kaufmann, Die ältestlinienbandkeramischen Funde von Eilsleben, Kr. Wanzleben, und der Beginn des Neolithikums im Mittelebe-Saale-Gebiet, in: *Nachrichten aus Niedersachsens Urgeschichte* 52, 1983, S. 191.
  - 15) D. Kaufmann, Kultische Äußerung., S. 124, 135, Anm. 11, 13.
  - 16) Ibid., S. 135, Anm. 12, 14.
  - 17) D. Kaufmann, Zwei bemerkenswerte linienbandkeramische Neufunde mit anthropomorphen Darstellungen aus dem Nordharzvorland, in: *Jschr. mitteldt. Vorgesch.* 53, 1969, S. 271 ; Ders., *Wirtschaft und Kultur der Stichbandkeramiker im Saalegebiet*, Berlin 1976, S. 76 ; U. Fischer, *Die Gräber der Steinzeit im Saalegebiet*, Berlin 1956, S. 29.
  - 18) J. Makkay, a. a. O., S. 166 f.
  - 19) Ibid., S. 168 ; D. Kaufmann, Kultische Äußerungen., S. 126.
  - 20) B. Kötting, Opfer in religionsvergleichender Sicht, in: *Frühmittelalterliche Studien* 18, 1984, S. 45.
  - 21) J. Makkay, Machlstein und das rituelle Mahlen in den prähistorischen Opferzeremonien, in: *Acta Archaeologica Academiae Scientiarum Hungaricae* 30, 1978, S.

- 19, 31.
- 22) W. Coblenz, Bandkeramischer Kannibalismus in Zauschwitz, in: *Ausgrabungen und Funde* 7, 1962, S. 68 ; H. Lies, Ein Gefäß der Linienbandkeramik mit reliefierten Gesichtsdarstellungen von Barleben, Kr. Wolmirstedt, in: *Ausgrabungen und Funde* 8, 1963, S. 15.
- 23) O. Höckmann, Andeutungen zur Religion und Kultus., S. 195 ; F. Felgenhauer, Ein "Tonaltar" .. S. 6 ff.
- 24) J. G. Frazer, *The Belief in Immortality and the Worship of the Dead I. The Belief Among the Aborigines of Australia, the Torres Straits Islands, New Guinea and Melanesia, The Collected works of J. G. Frazer*, vol. VIII, Richmond & Tokyo 1994, pp. 346ff., 352, 371, 380 ; J. G. Frazer, *The Belief in Immortality. II. The Belief Among the Polynesian, The Collected work*, vol. IX, 1994, pp. 10ff., 19ff., 23.
- 25) D. Kaufmann, Kultische Äußerungen im Frühneolithikum., S. 127.
- 26) A. Häusler, Zum Verhältnis von Männern, Frauen und Kindern in Gräbern der Steinzeit, in: *Arbeits und Forschungsberichte zur sächsischen Bodendenkmalpflege*, 14/15, S. 64 ff.; D. Kaufmann, a. a. O. S. 135, Anm. 20.
- 27) E. O. James, *Religionen der Vorzeit*, Köln 1960, S. 220 ; I. Winkelmann, Riten bei Bodenbauern-Agrarkulte (am Beispiel der Völker des Wolga-Kama-Gebietes) ,in: *Religion und Kult in ur-und frühgeschichtlicher Zeit*, Berlin 1989, S. 141.
- 28) I. Winkelmann, a. a. O., S. 142.
- 29) D. Kahlke, *Die Bestattungssitten des Donauländischen Kulturkreises der jüngeren Steinzeit*, Teil I, *Linienbandkeramik*, Berlin 1954, S. 131 ff.; N. Kalicz, J. Makkay, *Die Linienbandkeramik in der Großen Ungarischen Tiefebene, Studia Aethnologica* 7, Budapest 1977, S. 83, 178 ; H. Müller-Karpe, *Handbuch der Vorgeschichte*, Bd. II, *Jungsteinzeit*, München 1968, S. 365 ff.
- 30) E. Hoffmann, Spuren anthropogener Riten und von Schädelkult in Freilandsiedlungen der sächsisch-thüringischen Bandkeramik, in: *Ethnographisch Archäologische Zeitschrift* 12, 1971, S. 1-27.
- 31) H. Müller-Karpe, a. a. O., S. 366.
- 32) M. Pertl-wieser, O., S. 299 ff. Zeuzleben, Gemeinde Werneck, Landkr. Schweinfurt における刻線帯文土器文化期の土穴に、人の歯根の穴を穿たれ、紐が何かを刺し通された29個が埋められ、歯根に穴を穿たれた歯のうち、6個が門歯、9個が犬歯、5個が前臼歯、7個が臼歯であり、10個は10歳から11歳の子供の歯であった。少なくとも3人（うち子供が2人）、最多で29人の歯で、貝殻、かたつむりなどと一緒に連結されていた。J. Maringer, Menschliche Unterkiefer und Zähne in Brauch und Glauben der vorgeschichtlichen Menschen, in: *Anthrop. Anz*, 38, 1980, S. 69 ff.; L. Wamser, Ausgrabungen und Funde in Unterfranken 1978, in: *Franken-*

- land, Zeitschrift für Fränkische Landeskunde und Kulturpflege* NF 30, 1978, S. 320 ff. 頭蓋の崇敬と祭祀 (Verehrung des Schädels und Schädelkult) および下顎の崇敬 (Verehrung des Unterkiefers) について, G. H. R. Koenigswald, Skelettkult und Vorgeschichte I, in: *Natur und Museum* 105, 1975, S. 299 ff.; Ders., Skelettkult und Vorgeschichte II. Der unverzierte Schädel, in: *Natur und Museum* 106, 1976, S. 323 ff.; Ders., III. Der verzierte Schädel, in: *Natur und Museum* 107, 1977, S. 41 ff.; Ders., IV. Schädelmasken, in: *Natur und Museum* 107, 1977, S. 285 ff.; Ders., V. Schädelshalen und Unterkiefer, in: *Natur und Museum* 108, 1978, S. 125 ff.; Ders., VI. Deformierte Schädel und Schrumpfköpfchen, in: *Natur und Museum* 109, 1979, S. 65 ff.; E. O. James, *Religionen der Vorzeit*, Köln 1960, S. 119; E. Hoffmann, a. a. O., S. 19. 下顎の崇敬について, G. H. R. Koenigswald, Skelettkult und Vorgeschichte I, S. 231; Ders., Skelettkult und Vorgeschichte V, S. 125 ff. なお, Sena-Wöllnitz における鉄器時代の災難・病魔よけとして用いられたとみられる飾り付きの下顎について, W. Heinrich, L. Lepper, *Jena, Landschaft, Natur und Geschichte, Schriften des Stadtmuseums Jena* 7, S. 86 f.
- 33) M. Pertlwieser, a. a. O., S. 302 ff., J. Maringer, *Vorgeschichtliche Religionen*, Zürich-Köln 1956, S. 249 ; E. Hoffmann, a. a. O., S. 1 ff., 18 ; H. Friesinger, Anthropophagie und ihre Erscheinungsformen im Spiegel der Bodenfunde, in: *Mitteilungen der österreichischen Arbeitsgemeinschaft für Ur- und Frühgeschichte* 14, 1963, S. 16 ; D. Kaufmann, *Wirtschaft und Kultur der Stichbandkeramiker im Saalegebiet*, Berlin 1976, S. 88.
- 34) D. Kaufmann, *Kultische Äußerungen im Frühneolithikum*, S. 130.
- 35) B. Gladigow, Die Teilung des Opfers. Zur Interpretation von Opfer in vor- und frühgeschichtlichen Epochen, in: *Frühmittelalterliche Studien* 18, 1984, S. 35 ff.
- 36) R. Rolle, Zum Problem der Menschenopfer und kultischen Anthropophagie in der vorrömischen Eisenzeit, in: *Neue Ausgrabungen und Forschungen in Niedersachsen* 6, 1970, S. 47 ; O. Höckmann, Ein ungewöhnlicher neolithischer Statuettenkopf aus Rockenberg, Wetteraukreis, in: *Jahrbuch des Röm.-German. Zentralmuseums Mainz* 32, 1985, S. 106.
- 37) I. Winkelmann, a. a. O., S. 141.
- 38) D. Kaufmann, a. a. O., S. 131 f.
- 39) J. Maringer, *Vorgeschichtliche Religionen*, Zürich-Köln 1956, S. 240.
- 40) B. Kötting, Opfer in religionsvergleichender Sicht, in: *Frühmittelalterliche Studien* 18, 1984, S. 46 ; D. Kaufmann, a. a. O., S. 131, 134.
- 41) I. Winkelmann, a. a. O., S. 145.
- 42) D. Kaufmann, a. a. O., S. 135 f., Anm. 28.
- 43) K. Dobiak, Die bandkeramische Siedlung von Schröck bei Marburg (Lahn), in:

- Fundberichte aus Hessen* 15, 1975, S. 41 f.; O. Höckmann, Ein ungewöhnlicher neolithischer Stauettenkopf., S. 94 f.
- 44) O. Höckmann, a. a. O., S. 94.
- 45) O. Höckmann, Menschliche Darstellungen in der bandkeramischen Kultur, in: *Jahrbuch des Röm. -Germ. Zentralmuseums Mainz* 12, S. 3 f., Ders., Andeutungen zur Religion und Kultus in der bandkeramischen Kultur, in: *Aktuelle Fragen der Bandkeramik*, 1972, S. 190, Ders., Ein ungewöhnlicher neolithischer Stauettenkopf., S. 94 ; D. Kaufmann, Linienbandkeramische Kultgegenstände aus dem Elbe-Saale-Gebiet, in : *Jahrschrift der mitteldeutschen Vorgeschichte* 60, 1976, S. 90.
- 46) B. Gladigow, a. a. O., S. 38 f.
- 47) J. Makkay, Mahlstein und das rituelle Mahlen in den prahistorischen Opferzeremonien, in: *Acta Archaeologica Academiae Scientiarum Hungaricae* 30, 1978, S. 30 f.; O. Höckmann, Andeutungen zur Religion und Kultus in der bandkeramischen Kultur, S. 189 f.; Ders., Ein ungewöhnlicher neolithischer Stauettenkopf., S. 92 ff., 103 ff.
- 48) J. Makkay, a. a. O., S. 43 f.
- 49) O. Kunkel, *Die Jungfernhöhle bei Tiefenellern*, München 1955, S. 314 f.
- 50) G. Mossler, Die jungsteinzeitlichen Schädelbecher vom Taborac bei Draßburg, Burgenland, in: *Mitteilungen der Geographischen Gesellschaft*. Wien 91. 1949, S.132.
- 51) K. Krenn, Schädelbecher, in: *Sudeta* 5, 1929, S. 73 ff.; R. Rolle, *Zum Problem der Menschenopfer und kultischen Anthropophagie.*, S.49.
- 52) G. H. R. Koenigswald, Skelettkult und Vorgeschichte I, II, III, IV, V, VI; Vgl., R. A. Maier, Urgeschichtliche Opferreste aus einer Felsspalte und einer Schachthöhle der Fränkischen Alb, in: *Germania* 55, 1977, S. 25.
- 53) D. Kaufmann, a. a. O., S. 133 f.
- 54) I. Winkelmann, a. a. O., S. 144 f.
- 55) 氏族共同態 (Sippengemeinschaft) の研究史の考察と氏族共同態の変遷について, 三浦弘万『ゲルマン経済・社会・文化の史的研究』(杉山書店) 5~58ページ, 「共同態」と「共同体」について, 同書3ページ, 注(1)参照。
- 56) B. Kötting, a. a. O., S. 46 f.
- 57) J. Cauvin, *Naissance des divinités, naissance de l'agriculture. La révolution des symboles au Néolithique*, Jalès 1994, 2. ed., 1997; *The birth of the gods and the origins of agriculture*, translated by T. Watkins, Cambridge 2000, pp. 12 f., 21, 32, 44 ff, 47, 71 ff., 48 ff., 67 ff., 121 ff., 124f., 137ff. ; B. Lerro, From earth spirits to sky gods the socioecological origins of monotheism, individualism, and hyperabstract reasoning from the Stone Age to the Axial Iron Age, Maryland 2000, pp. 63 ff., 67, 97 f. ; M. Eliade, *The Forge and the Crucible*, trans, by S. Corrin, New York 1962,

pp. 52 f.; I. M. B. Wiman, *Expecting the Unexpected. Some Ancient Roots to Current Perception of Nature*, in: *Ambio* 19, 1990, pp. 62-9; G. B. Ferngren (ed.), *The History of Science and Religion in the Western Tradition*, New York & London 2000, pp. 38 ff.

- 58) J. Maringer, *Vorgeschichtliche Religionen*, S. 224; K. H. Otto, *Urgesellschaft*, in: *Weltgeschichte*, Bd. 1, Leipzig 1979, S. 34.